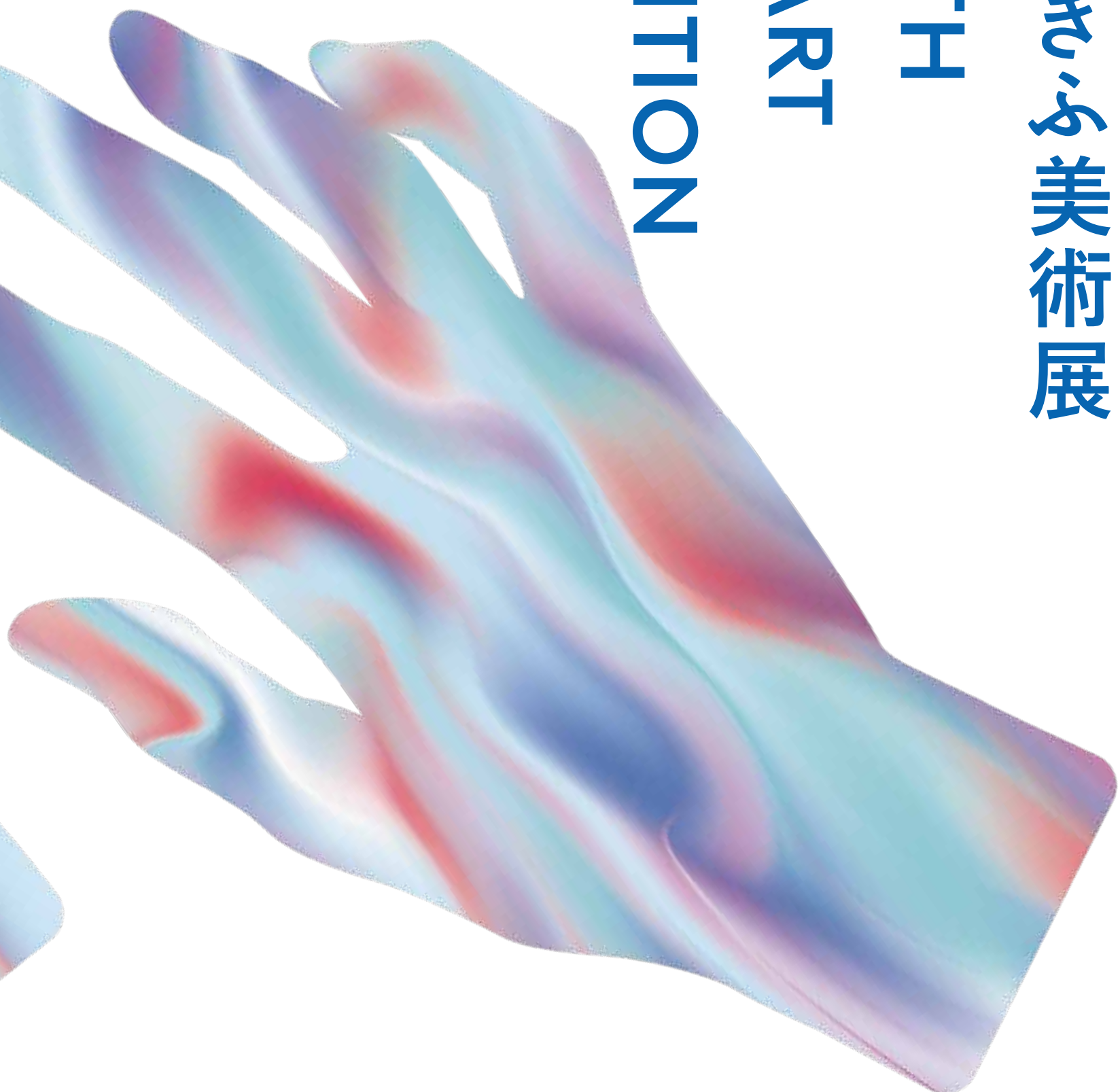


第6回ぎふ美術展

THE 6TH

GIFU ART

EXHIBITION



第6回ぎふ美術展 THE 6TH GIFU ART EXHIBITION

2025.08.09 SAT—08.24 SUN

主催 岐阜県・岐阜県美術館、(公財)岐阜県教育文化財団

目次

ごあいさつ	2
審査員講評	4
受賞作品	8
出品目録	43
会場風景	47
関連プログラム	48
応募要項	54
応募状況	56
来場者アンケート	57
広報	58
記念品の紹介	60
企画委員長総評	61



ごあいさつ

戦後69回の歴史を重ねた「岐阜県美術展」を刷新し、2018年に始まった「ぎふ美術展」は、県民の皆様に創作活動の成果を発表いただく公募展として、今回で6回目の開催となりました。

ぎふ美術展は、年齢、性別、障がいの有無に関わらず、誰もが参加できる開かれた公募展です。今回は、本県を含む19都府県の7歳から92歳までの皆様から、780点ものご応募をいただき、厳正な審査を経て選ばれた308点の作品を展示しました。本展覧会が県内にとどまらず広く認知され、多くの方にご参加いただけたことを大変うれしく思います。

審査員には、各分野における第一人者をお迎えし、「表現のレベルの高さに驚いた」「豊かな発想に裏打ちされたのびやかな作品が多かった」「多様な表現による作品群であった」といったご講評をいただくとともに、作品の多様性や完成度に対して高い評価をいただいたところです。

展覧会では、入選作品の展示に加え、週末には作品講評会や審査員によるトークイベントを開催し、展覧会全体で1万7千人を超える多くの方々にご来場いただきました。

また、同時期に、県美術館及び県図書館において開催した「県民文化の森 夏のわくわくプロジェクト」では、多くの方が来場され、芸術文化に親しむ姿が見られました。

今後も、「ぎふ美術展」をはじめとする様々な文化事業を通じて、多くの人々が集い、賑わいあふれる岐阜県となるよう努めてまいります。

岐阜県知事 江崎 禎英



ごあいさつ

厳しい暑さに見舞われたこの夏、岐阜県では7月・8月の猛暑日が40日間以上となるなど、記録的な日となりました。そのような厳しい気候の中、今回も全国各地から多くの作品が寄せられました。「うまれる。あふれだす。」という第1回から続くサブタイトルの通り、今年も岐阜県から新たな芸術が生まれ、創造の息吹があふれる公募展となりました。

「岐阜県の公募展はレベルが高い」「毎年楽しみにしている」といった、応募者や鑑賞者の皆様から寄せられた感想の数々からも、「ぎふ美術展」が県民のみならず全国の芸術家に親しまれ、愛されていることが伝わってまいります。こうした声は、私たちにとって何よりの励みであり、本展が岐阜県内の美術・文化の振興に寄与する重要な役割を果たしていることを、改めて実感する機会となりました。

本財団では、年代・性別・障がいの有無を問わず、県内の文化団体や県民の皆様の創造性と意欲を高めることに努めています。芸術文化振興の促進を図るとともに、さらなる情報発信と支援を目指し、今年7月1日には「アーツ・クリエイションぎふ」を設立しました。これにより、取り組みの深化を進めているところです。今後も、新たな芸術の創生に向けて歩みを進めて参る所存です。

最後に、本展の開催にあたりご尽力いただいた審査員、企画委員の皆様にご心より感謝申し上げます。また、作品をご応募くださった皆様、会場に足を運んでくださった来場者の皆様のご参加に、深く御礼申し上げます。

公益財団法人岐阜県教育文化財団 理事長 高木 敏彦

日本画部門



岩田 壮平
IWATA Sohei
日本画家／武蔵野美術大学教授

目の前の此处に運ばれ来たる各々の応募作品には、きっと多くの描く苦労や楽しみ、そして夢が込められているのだらうと、今回の審査をさせて頂くなかで私は想像せずに居られなかった。これは私がきっと描き手側だからなのかも知れないが、その一つ一つの力作に賞と入落を付けねばならない苦しさをその都度に何時も思う。

僅かながらの差で分かれてゆく作品たち。その向こう側に見える描き手の姿に、共に同じ様に絵を描く私の姿を重ね合わせてしまう。そんな描き手の決めかねてしまう心の頼り無さを審査でご一緒させて頂いた名都美術館の鬼頭美奈子氏にとっても助けて頂いた。

今回、出品された皆さんが、作品を描くにあたり努力をされた真実は紛れもない事実。どうか結果に左右されず、確信を持ってこれからも描き続けて頂きたいと心から願うばかりである。

ぎふ美術展賞に選ばれたリイシンさんの『アイデアの形』。この作品は、初めから作品の持つ求心力が一際であった。白と黄色を基調としクリームトを彷彿とさせる装飾性を用いて、ある年頃の女性の心の内実をリアルに表現したものと思う。描くことに未だ未成熟ではあるが、かえてその拙いところが成熟し切れてはいないこの作家の今後の未来性を大に感じるどころであった。

優秀賞の水野壽子さんの『秋寂び』は、自然の美しさというものを丹念に岩絵具で描き出し、日本画特有のパッションではない、平常心で以て淡々と創造するその姿勢に感銘を受けた。また、かわかみはるかさんの『エンドロールはまだ遠く』。高速バスの車内に籠る閉塞感が若者の持つ悩みの重苦しさ、垣間見える窓越しの夜景に暗示される夢や希望、その絶妙な表現力。

奨励賞の伊藤薫さんの『花の舞ふ』。岡田玲奈さんの『もちもちな夢を見て』。古川幸代さんの『花回廊』。和久田尚希さんの『碧を味わう』。そして入選された方々を含め、一つ一つの作品と対峙したその瞬間の感動が審査を終えた私の身体中をいま巡っている。



鬼頭 美奈子
KITO Minako
名都美術館学芸課長

豊かな発想に裏打ちされたのびやかな作品が多く、中でも受賞作はメッセージが明確で心に響く高い表現力を備えていました。

ぎふ美術展賞に輝いた『アイデアの形』は、古典に学びながらも造形性を意識した構図にオリジナリティが窺え、圧倒的な訴求力を感じました。一方、優秀賞『秋寂び』は奥ゆかしい表現に命の輝きが映し出された一作です。自然と対峙し摺り得た本質が丁寧な筆致に息づき、静謐な世界観を醸します。同じく優秀賞『エンドロールはまだ遠く』は作者が抱く不安や苦悩がストレートに示され、創造者としての偽りない姿に共感を覚えました。

奨励賞を受賞した4作品は各々が自身の表現と向き合い、突き詰めていこうとする真剣さが絵としての充実感に繋がったといえます。答えを求めてひたすら筆を重ねることで一つの理想が浮上する、そんな実直な絵作りが審査の決め手となりました。



洋画部門



水沢 勉
MIZUSAWA Tsutomu
美術史家／美術評論家

今回の洋画の審査に当たって感じたことをここに記しておきます。いま審査を終えたばかりでの感想です。応募作品230点を拝見し、全体として表現のレベルの高さにとても驚きました。そして、作品をひとつひとつ審査していくにつれ、その多様さにも圧倒されました。それは表現の自由がジェンダーや年齢や地域にとらわれずに追及できているからだと思われまます。

もちろん、岐阜という自然豊かな環境が大事な背景になっているはずですが、それにも縛られずに、より広い自然との対話を描き出そうとするいくつかの作品にエコロジーとの親和性が感じられたのです。具体的には、ぎふ美術展賞を受賞したユリさんの《サルがいる風景》は、その典型ではないでしょうか。また、奨励賞の対象となった久古春輝さんの《底流》は、油彩画によるミニマルな表現によって、逆に、自然の広がりも連想させてくれるものでした。そうした表現全体の広がりや豊かさが、政治闘争にとらわれた硬直したイデオロギーからの解放としての自由さを体現していたのです。



柳澤 紀子
YANAGISAWA Noriko
美術家／版画家

優秀賞作品の篠田ひろのりさんの「(内的時間意識の)1秒」のタイトルにもすでに表現されているが、一秒の背後に存在する彼の人生の実体を客観視しようとした秀逸な作品です。勇気の要る仕事ですが、今後を期待しています。

ぎふ美術展賞のユリさんの「サルがいる風景」には、最初眼にした瞬間から魅かれました。混沌とした現代社会の中における人間達のおろかな姿をサルがいかに見ているかを訴えている力作です。バックに毛皮を使用していることも、より強いメッセージとなりました。

本年度のテーマは「うまれる。あふれだす。」でしたが、テーマにふさわしい230点もの作品の応募があり、しかも多様な表現による作品群であったことには、岐阜県の風土を感じ、うれしく思いました。

中でも奨励賞の寺部枝梨賀さんの「転寝」はユーモラスなタイトルに反し、静謐な画面に、確かなデッサン力と表現された美しく澄んだ色調、殊にブルーは、長良川の朝の光に映える水面を想い出したが、作家が18歳と伺い、豊かな将来を思いました。

彫刻部門



建畠 哲
TATEHATA Akira
草間彌生美術館館長

彫刻部門の応募作品は素材も技法も極めてバラエティーに富んでおり、7歳の作品が入選するなど年齢の幅の広さにも驚かされたが、それぞれ自由に制作を楽しんでいる雰囲気伝わってくる審査であった。ぎふ美術展賞の竹田歩里さんの《内包する形》は渦を巻きながら上昇する有機的な襲とそれが内包する空洞からなる作品で、技術的な完成度の高さと陶彫ならではの生命感を宿す独自の造形力を高く評価したい。優秀賞の松原賢典さんの《エリア180》は人体を思わせる特異なメタファーをはらんだ作品で、陶を素材としても上記の表現とは対照的な一種不穏なところのある形態感覚や粗いテクスチャーがもたらすインパクトに注目した。同じく優秀賞の堀場葵己さんの《17才、私の風のカタチ》は石と木とを組み合わせた作品で、きわめてシンプルでバランスのとれた構成に惹かれた。奨励賞の尾藤敏彦さんの《蠟型鑄造作品 対作品 窠Ⅰ・窠Ⅱ》はさまざまな金属のパーツからなるいわゆる集合彫刻で、人体のイメージとメカニカルなイメージとを一体化させるという発想が興味深い。



宮永 愛子
MIYANAGA Aiko
美術家

彫刻制作は、広い場所や重量の関係など、制限が生まれやすい分野かと思います。その中で、完成し出品までというみなさんのエネルギーは、同じ作り手として心にふれます。さてその中で、《内包する形》は丁寧な制作や大きな造形力に二人の意見が一致し、迷わず大賞に選びました。優秀賞の《17才、私の風のカタチ》は、17歳らしからぬ玄人風で、実直な姿勢がよく見て取れました。もしも美大に行って作家になる予定があるのなら、もっともっと自分を壊してみたい！ 対して《エリア180》は遊び心とこなれた演出が利いている作品。どちらの二人にもまだまだ作品を作り出してほしいなという気持ちで、賞を選びました。奨励賞に《踊るねこ》と《鳥とおはなし》を。タイトルと猫のフォルムがなんとも効いていて楽しく、鑑賞者のみえるふいごの優しい音色もよかったです。また受賞には至りませんでした。亀の作品も素材集めの場所や形にとっても興味が湧きました。

工芸部門



花里 麻理
HANAZATO Mari
茨城県陶芸美術館学芸課長

本年度の工芸部門は79点の応募作品から40点を入選しました。工芸は本質的に身近な存在であり、かつ、自身の思いを表現するメディアでもあるため、応募作品は実に多彩で、審査の難しさを感じましたが、作品を繰り返し眺めるうちに、創作性、技術力、表現力の目立った作品が受賞へと至った次第です。

ぎふ美術展賞を受賞したのは、岩井美佳さんの染色作品《胞膜 20240810》です。毛細血管のように広がる線文が妙に艶めかしく、心に触れました。銀箔や刺繍の造形上のアクセントや五角形の形状も効果的でした。優秀賞の千賀彩永さんの陶芸作品《滴る》と、Eltteさんのガラス、貝殻、木材を組み合わせた《「海の祈りー Réminiscence」》は、素材の可能性に向き合い続けた時間の長さがエネルギーに結実したと思います。

最後に他部門の話題ではありますが、工芸素材と技術による作品が、彫刻部門や自由表現部門に入選しています。部門別の応募方法の課題を示唆していると思いました。



森野 泰明
MORINO Taimei
陶芸家／日本芸術院会員

出品作品は工芸素材を表現の媒体とする造形志向の作品と発想を工芸の原点に求める二つに大別できる。

ぎふ美術展賞の岩井美佳さんの「胞膜 20240810」は抑制のきいた表現で微妙な色調の変化は豊かな装飾性を発揮している。優秀賞のEltteさん『「海の祈りー Réminiscence」』は清新にして意欲的な感覚を具現化している魅力のある作品である。千賀彩永さんの「滴る」の作品は円味のあるふくよかさと、土の持つ自然な味わいと自己の感覚を燃焼させようとする心情が豊かにうたいあげられている。

奨励賞の尾藤真琴さんの「日常」のガラスは小品ながら単純明快なフォルムに作者の装飾作調が発揮され創意に満ちた作品である。松井祐人さんの「流線揺鉢」は口クロ成形で、土の持つ自然な味わいとそれをコントロールしながら自己の感覚を燃焼させようとする作者の意向が感じられる。沙城さんの「Bug Voice」は独自の装飾性が現代感覚に溢れ、ユニークな発想で不思議な世界を創出している。

書部門



黒田 賢一
KURODA Kenichi
書家／日本芸術院会員／日展副理事長

第3回展の審査に寄せていただいて今回で2回目の任に当たらせていただきました。出品点数が思っていた程でなく作品の質がどうかと心配な面もありましたが、漢字、かな、調和体と多岐にわたり出品されており、地方展としては充実したレベルの作品が数多く見られました。

漢字作品は線が多彩で変化に富んだ書風が目を引きました。

かな作品は古筆の雰囲気を感じながら自分の表現を試みた作が数多く見受けられました。

特にぎふ美術展賞の高井敦史さんの作品は厳しく多彩な線情で大胆な動きとともに鮮明な白が紙面を支配する感動的な秀作でした。

優秀賞と奨励賞については練度とともに筆力のある作を中心に選出しました。

書は積み重ねの芸術でもあり、今後の日々の精進を心から願うとともに新しい息吹を感じさせる作品が寄せられることを期待いたしております。



沢村 澄子
SAWAMURA Sumiko
書家

バラエティに富んだ選出ができたことは収穫であった。公募展審査ではどうしても練度の高いものインパクトのあるものが目につきやすいが、ひそやかな息の中に人間や書の尊さを伝える作もあった。

伝統書にも拮抗する現代書の台頭を期待する者として、伝統の厚みにも食い下がる程の作家性、理念のようなものの必要を思う。それらが個を超えて普遍性を帯びるまで書かんとする書人がこの美術展から飛び出してくるなら、嬉しい。一方、楽しみとして書をし、そこに生活の潤いや人生の充実を求めることも意義深く、それを伝える書にも大事を思った。

応募者の書との関わり方はそれぞれに異なる印象であったが、一様にひたむきであるところが心地よく、良し悪しを決定する審査であったとは捉えず、ある価値を共有し、共に考える機会だったと思って頂けると幸いである。受賞作はいずれも練度のほかに、大きさが美しさとなって印象に残った。

写真部門



鈴木 理策
SUZUKI Risaku
写真家／東京藝術大学教授

私は写真を見る時、自分ならシャッターを切るかを考えます。そうすることで、構図の選択やタイミングにおける撮影者の意図がより深く理解できるからです。今回の応募作品には撮影者の意思が感じられる力強い意欲作がたいへん多くありました。私は、画面の中で全てを語り尽くそうとするよりも、フレームの外に広がる空間やシャッター前後の時間を想像させる写真にこそ、見る人を刺激する広がりや深さが生まれると考えます。今回のぎふ美術展賞を受賞したねこねさんの作品では、猫を追って通った福岡県の相島で、やがて島の人々との関係が生まれていくこと、その変化が静かに語られていました。写真らしい画面をつくることより、対象への想いや出会いの喜びに突き動かされるように撮影を重ねている点が評価されました。写真を撮ること自体が目的なのではなく、伝えたいことを表す方法として写真を用いる姿勢が大切だと思います。



竹内 万里子
TAKEUCHI Mariko
写真批評家／京都芸術大学教授

写真を撮ること自体は、ある意味では簡単です。しかしそれを、作品と呼ぶ他ないものへと深めるためには、撮ったものをとことん見つめ、考え、迷い、自分自身も変わり、再び挑戦し、失敗する、その長く複雑な繰り返しの過程を要します。今回、応募者の方々のそうした営為の成果を審査させて頂けたことは、この上ない喜びでした。特にぎふ美術展賞の「水は水の中に溶け込んでいくように」では、その誠実な彷徨のありようがシークエンスの中から立ち現れ、率直に言って胸を打たれました。

全体に力作が多かった印象ですが、若干気になったのは、黒いマットを使った作品が大変目立ったことです。黒という色はとても強く、写真の色彩やニュアンスの繊細さを損ねることがあります。額装やマットの方法にもたった一つの正解があるわけではないのですから、ご自身の大切な作品の良さを最大限に活かすために、もう少し慎重かつ柔軟に考えられてはいかがでしょうか。写真表現のさらに伸びやかな展開を願い、あえてここに書き記しておきたいと思います。

自由表現部門



曾谷 朝絵
SOYA Asae
美術家

たくさんの素敵な作品と会話して、へとへとですが、楽しい一日でした。

森鈴奈さんの《まめらちゃん》は、モフモフしたくなるかわいさの裏に、キメラ的な毒っぽさがあり環境問題を想起してしまいました。細部まで完成度が高く、拔き出ている印象でした。

鈴木博也さんの《顔・顔・顔》は、レーザーカットのシャープさと、とぼけたような顔の表情のバランスが絶妙。工業的な素材や方法をアートに昇華させていて、新鮮でした。

遠藤慎太郎さんの《縫れる社会》は、社会問題に真っ直ぐ向き合っていて、他と一線を画していました。中が空洞なのも意味深で、狂乱の社会の空虚さを表しているのでしょうか。

NOMUさんの《生命の樹》は、色彩が魅力的で、遠目に木が立ち上がる構図も印象的。近くで見ると少しさっぱりしていたので、もう一步狂気を感じるくらい描き込んだものも見てみたいです。

矢澤七奈さんの《野原》は、要素をギリギリまで絞り込んでいるのに、日本の野原の音や空気を感じさせる不思議な実感がありました。人の手にしかできない。100%オーガニックな表現が光っていました。

自由表現部門は本当に何でもアリですが、表現の内容や方法に優劣はつけられない分、「やり切っているか」が大きなポイントでした。そして、何らかの形で“今”と向き合っていることも大切にしました。社会の今、自分の今、色々な今がありますが、何かのリバイバルではない、今を生きている人間の表現が見たいです。

入賞を逃した作品にも魅力的なものが、本当にたくさんありました。賞は一時ですが、創作は長いです。これからも創り続けましょう！



堀越 英嗣
HORIKOSHI Hidetsugu
建築家／東京藝術大学客員教授
芝浦工業大学名誉教授

ぎふ美術展賞に選ばれた「まめらちゃん」は不思議で圧倒的な存在感が見るものに、問いかける力と緻密さと完成度の高さを併せ持つ素晴らしい作品です。優秀賞の「顔・顔・顔」は不思議な既視感と緻密でピュアな完成度で複雑な現代への回答を感じました。「縫れる社会」は縫れた軽い新聞記事の筒と空洞が現代社会へのアートとしての貴重な問いでした。「自分が動けば、世界が変わる」は現代社会の緻密な機構がおおらかな宇宙とつながるスケールを感じさせてくれる。

「鮎」は自然の中で生き抜いた樹木の断面の景色を鮎が生き生きと泳ぐ川の世界に見立てた、イマジネーション溢れる喜びを感じる作品でした。今回、自由表現部門の作品から、アートが本来もつべき役割である「問いかけ」の力と複雑な現代に対する「答え」としてのデザイン力等、伝統に縛られない自由な素材と手法で、本来のアートが表現すべき大切な意義を感じました。



ぎふ美術展賞 《イデアの形》リイシン（東京都）



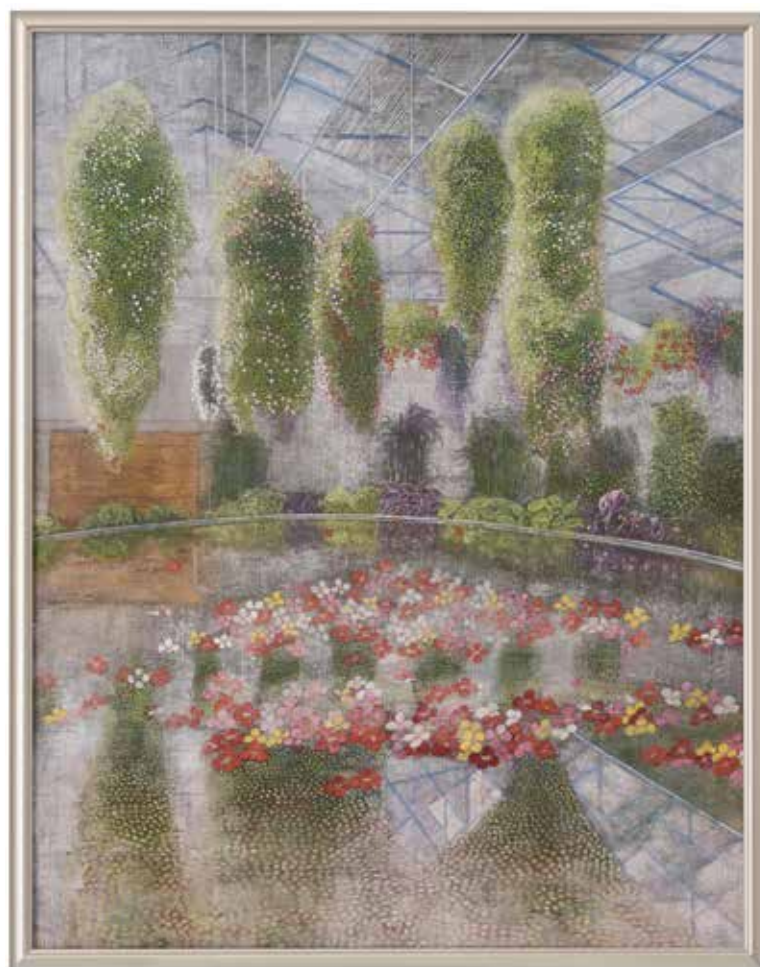
優秀賞 《秋寂び》水野 壽子（瑞穂市）



優秀賞 《エンドロールはまだ遠く》かわかみ はるか（東京都）



奨励賞 《花の舞ふ》伊藤 薫（関市）



奨励賞 《花回廊》古川 幸代（垂井町）



奨励賞 《碧を味わう》和久田 尚希（静岡県）



奨励賞 《もちもちな夢を見て》岡田 玲奈（愛知県）



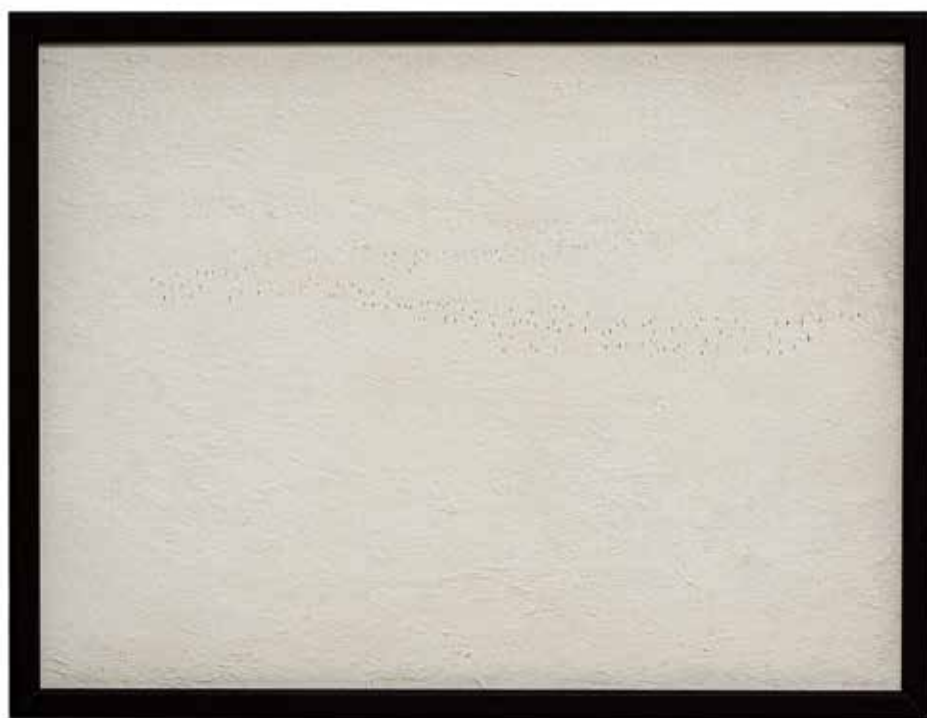
ぎふ美術展賞 《サルのいる風景》ユリ（関市）



優秀賞 《（内的時間意識の）1秒》篠田 ひろのり（八百津町）



優秀賞 《慈雨》白石 絵美（愛知県）



奨励賞 《底流》久古 春輝（岐阜市）



奨励賞 《転寝》寺部 枝梨賀（岐阜市）



奨励賞 《化身》 島田 加寿子（愛知県）



奨励賞 《一日一枚～山との対話～》 田中 天顕（愛知県）



ぎふ美術展賞 《内包する形》竹田 歩里（瑞穂市）



優秀賞 《17才、私の風のカタチ》堀場 葵己（羽島市）



優秀賞 《エリア180》松原 賢典（岐南町）



奨励賞 《鳥とおはなし》 渡邊 正康（飛騨市）



奨励賞 《蠟型鑄造作品 対作品 窠Ⅰ・窠Ⅱ》
尾藤 敏彦（郡上市）



奨励賞 《踊るねこ》ハットリ ユミコ（愛知県）



ぎふ美術展賞 《胞膜 20240810》岩井 美佳（石川県）



優秀賞 《「海の祈り－Réminiscence」》 Eltte（土岐市）



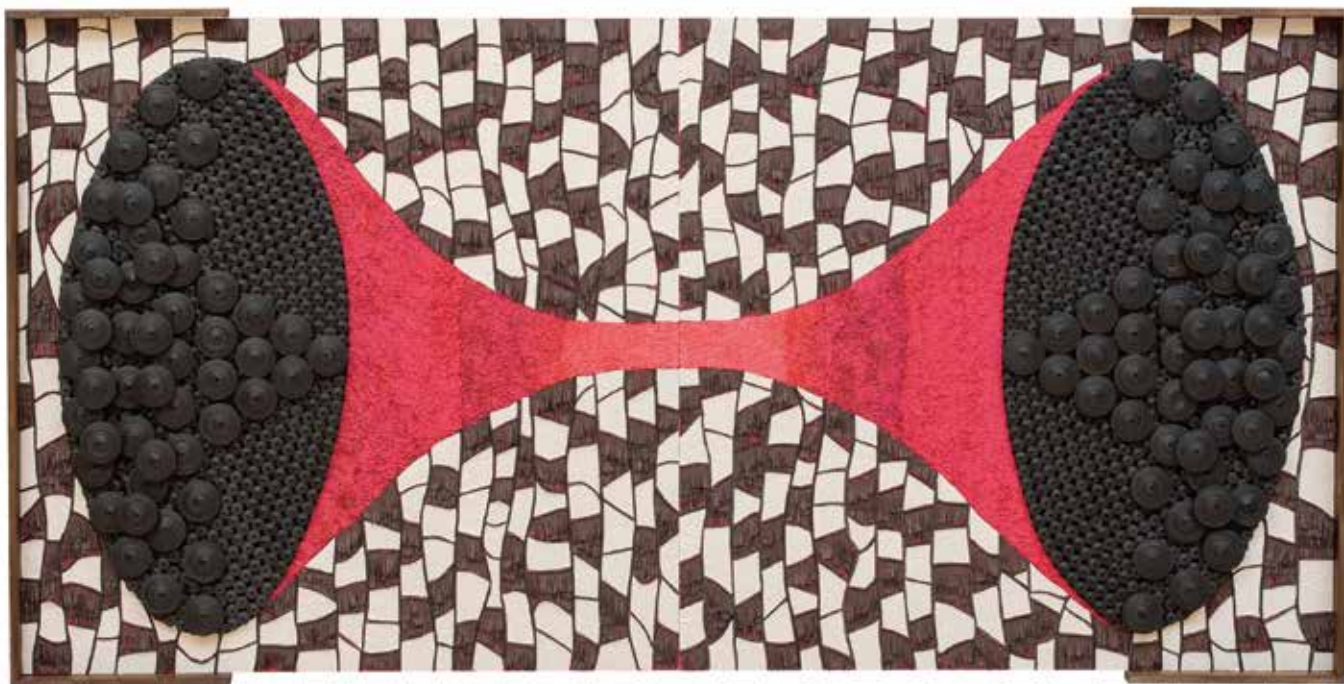
優秀賞 《滴る》千賀 彩永（養老町）



奨励賞 《流線揺鉢》松井 祐人（多治見市）



奨励賞 《日常》尾藤 真琴（郡上市）



奨励賞 《Bug Voice》 沙城（愛知県）

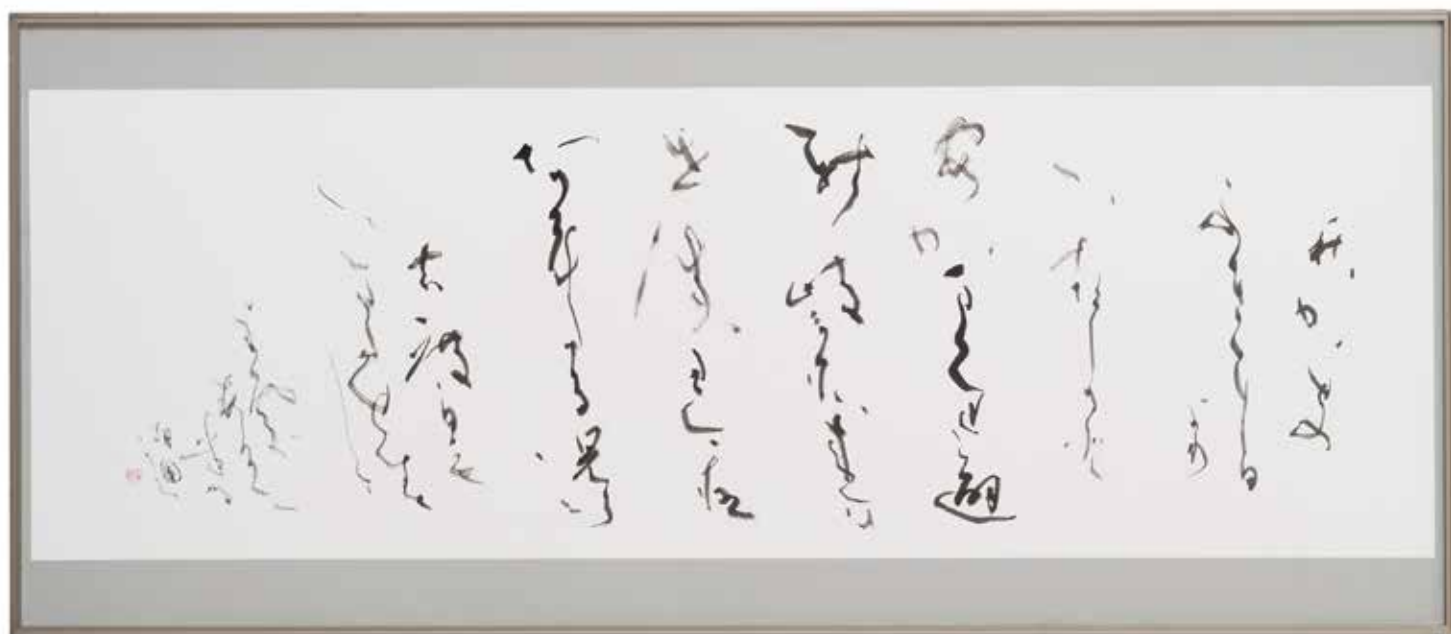


ぎふ美術展賞 《白居易詩》高井 敦史（垂井町）



優秀賞

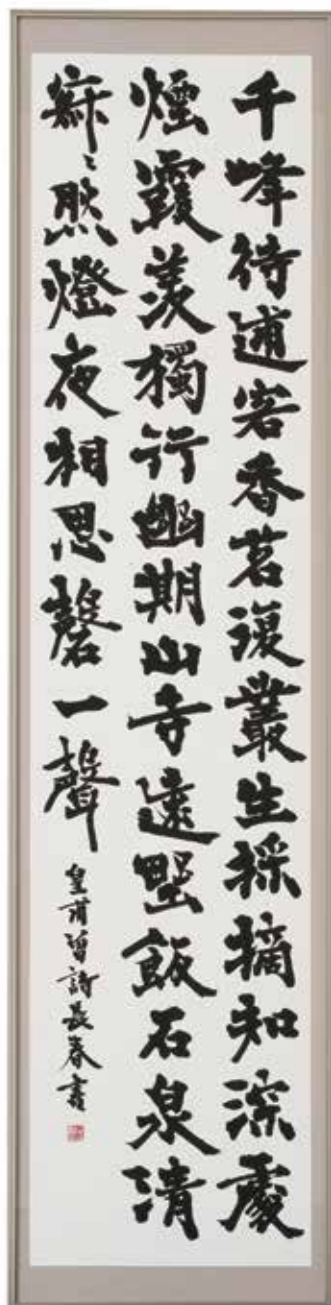
《窓燈林霽裏》
徳田 蒼春（高山市）



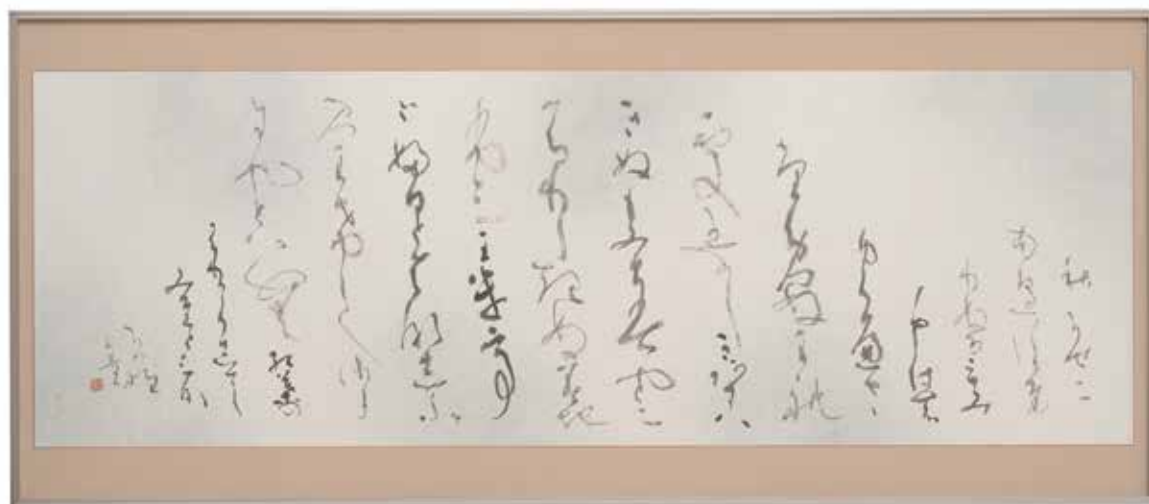
優秀賞 《万葉集》安田 胡園（関市）



奨励賞 《秋の夕暮》清水 青蘭（岐阜市）



奨励賞 《皇甫曾詩》奥田 長春（大垣市）



奨励賞 《秋風に》加藤 玉華（郡上市）



奨励賞 《草廬（橘曙覧の歌）》鬼頭 伸寿（福井県）



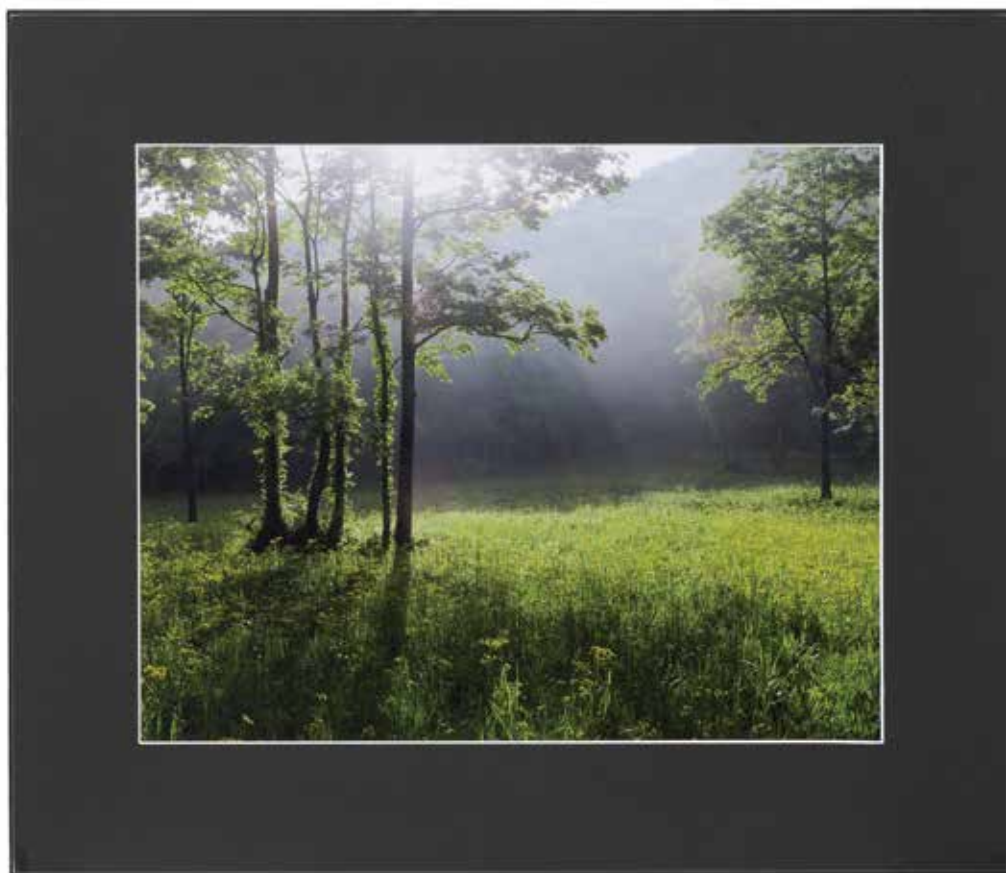
ぎふ美術展賞 《水は水の中に溶け込んでいくように》ねこね（東京都）



優秀賞 《妖塊》岩村 政利（笠松町）



優秀賞 《最愛のエリナがいたこと》 中村 正宏（東京都）



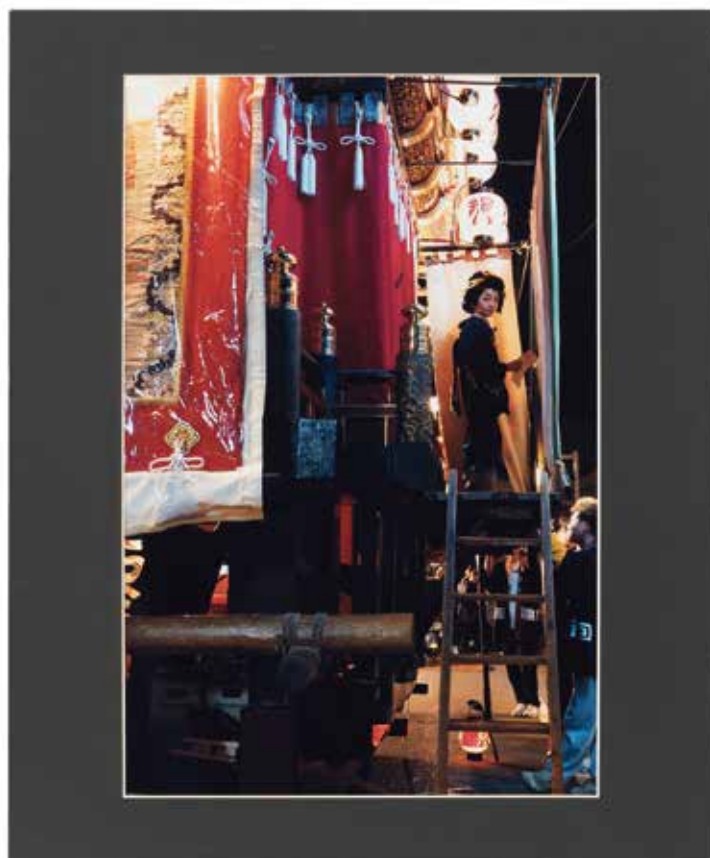
奨励賞 《早朝の湿原》岡田 則子（飛騨市）



奨励賞 《鉄塔 瞬き》佐藤 奈緒（飛騨市）



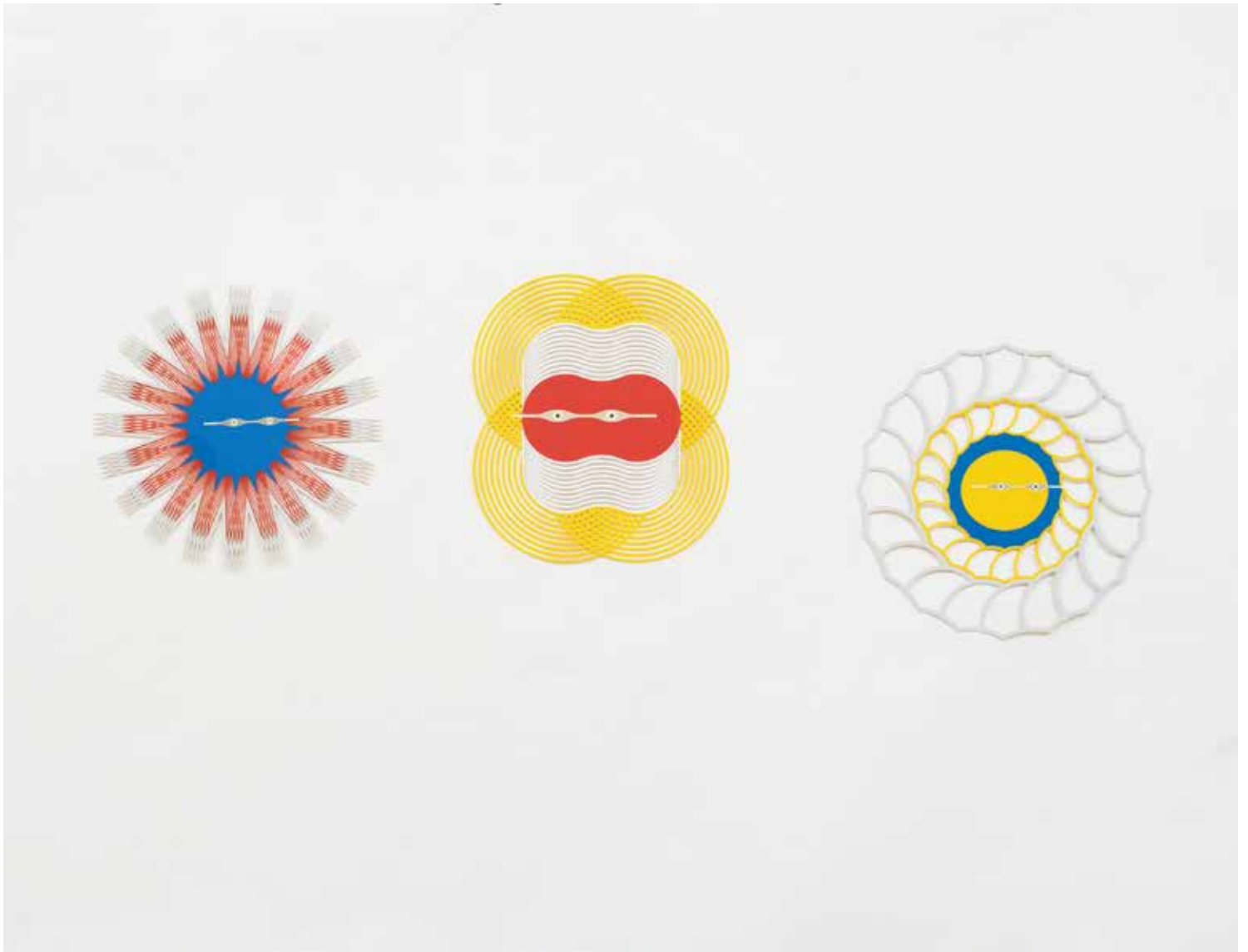
奨励賞 《光射す》谷口 安秋（飛騨市）



奨励賞 《出番前》北嶋 敏和（垂井町）



ぎふ美術展賞 《まめらちゃん》森 鈴奈（東京都）



優秀賞 《顔・顔・顔》 鈴木 博也（東京都）



優秀賞 《縛れる社会》遠藤 慎太郎（愛知県）



奨励賞 《生命の樹》NOMU（岐阜市）



奨励賞 《鮎》中島 由美子（郡上市）



奨励賞 《野原》矢澤 七奈（愛知県）



奨励賞 《自分が動けば、世界は変わる》壺保 順也（兵庫県）

出品目録

日本画

ぎふ美術展賞	アイデアの形	リイシン	東京都
優秀賞	秋寂び	水野 壽子	瑞穂市
優秀賞	エンドロールはまだ遠く	かわかみ はるか	東京都
奨励賞	花の舞ふ	伊藤 薫	関市
奨励賞	花回廊	古川 幸代	垂井町
奨励賞	碧を味わう	和久田 尚希	静岡県
奨励賞	もちもちな夢を見て	岡田 玲奈	愛知県
入選	安息の森	伊藤 睦美	岐阜市
入選	四季の小径	伊藤 敏彦	大垣市
入選	とざされた少女像	水上 春嶽	大垣市
入選	游泳	柳沼 至	大垣市
入選	KAIGYO	所 久美子	関市
入選	雨上ル	河田 正樹	各務原市
入選	虹の下では	高橋 かおる	各務原市
入選	昇龍の如く	真野 由紀子	各務原市
入選	高峰の杉社に春が	川井 庸弘	可児市
入選	藤棚の光陰	石田 幸誠	山県市
入選	花と魚と人と…	山脇 珠香	山県市
入選	森のはじまりー新緑とヤマザクラー	高橋 峰保	瑞穂市
入選	本の森、活字の海 II	山川 竹之	本巣市
入選	約束	浅井 新太	下呂市
入選	未来	颯白	下呂市
入選	今年も会えたね	北村 史子	垂井町
入選	鍛冶屋の洗礼	亞種	東京都
入選	金色の時・妬	鋳 さやか	東京都
入選	取捨選択の賜物	天野 彩音	愛知県
入選	ごちそうさまだ	伊藤 歩生	愛知県
入選	favorite	大木 宙	愛知県
入選	星の舞踏	小川 友季	愛知県
入選	Bolero	坂井 良美	愛知県
入選	陽だまりの扉	佐藤 来海	愛知県
入選	猛虎図	田中 雛乃	愛知県
入選	昏々と眠る	中島 梨瑠	愛知県
入選	雪の太鼓楼	長山 宏	愛知県
入選	「 」	ぷりん	愛知県
入選	独	矢崎 大成	愛知県
入選	遺香	藤田 大翔	三重県

洋画

ぎふ美術展賞	サルのいる風景	ユリ	関市
優秀賞	(内的時間意識の) 1秒	篠田 ひろのり	八百津町
優秀賞	慈雨	白石 絵美	愛知県
奨励賞	底流	久古 春輝	岐阜市
奨励賞	転寝	寺部 枝梨賀	岐阜市
奨励賞	化身	島田 加寿子	愛知県
奨励賞	一日一枚～山との対話～	田中 天顕	愛知県
入選	Hey, my fam	大野 結楽	岐阜市
入選	傍観	押味 忠志	岐阜市

入選	静謐	菊井 文華	岐阜市
入選	祈り	神山 悦夫	岐阜市
入選	静寂の山里風景	佐藤 正己	岐阜市
入選	おしこんでとじこめて	澤 永遠子	岐阜市
入選	休憩時間	杉浦 明美	岐阜市
入選	パリ・ダンサー	杉原 代志子	岐阜市
入選	夢の通り道を歩いています	高見 敏幸	岐阜市
入選	ほのかとふうか	武山 隆	岐阜市
入選	After the Harvest	永家 秀子	岐阜市
入選	息づくもの	林 叶子	岐阜市
入選	不一致の生き様	細野 沙空	岐阜市
入選	cheval ailé	米山 歩佑	岐阜市
入選	古（いにしえ）の青春	伊藤 憲志	大垣市
入選	母からの贈り物	久世 久子	大垣市
入選	赤坂ボタン園	名和 昭司	大垣市
入選	昭和のピリヤード場	早野 純一	大垣市
入選	拝啓、二度と会えないあなたへ	村井 美公	大垣市
入選	富山市と立山連峰	山田 英史	大垣市
入選	深淵にたたずむ	上屋 美千弘	高山市
入選	記憶の中で 2025-1	長瀬 哲夫	高山市
入選	荒野の瞳	石神 純	多治見市
入選	現代社会における孤独と内省	井上 隆志	多治見市
入選	帰り道	柴田 藍衣	多治見市
入選	森の息吹	榊原 由美子	関市
入選	アース・カービング	深井 保正	関市
入選	十字架によって神と和解させてくださった	土屋 英一	瑞浪市
入選	風神・雷神	近藤 孝夫	美濃加茂市
入選	Who are you?	伊佐治 孝文	土岐市
入選	旧、脇本陣の屋根	酒井 勝正	各務原市
入選	晩夏の焼岳	佐藤 捷年	各務原市
入選	時の記憶を読む	戸部 善晴	各務原市
入選	一隅	森 泉	各務原市
入選	気色	山田 和子	各務原市
入選	兎の想い	小川 ひろみ	瑞穂市
入選	さあ、いこう	長田 真二	瑞穂市
入選	早春に咲く	小島 由美子	瑞穂市
入選	家族の絆	歳藤 豊子	瑞穂市
入選	長良川河畔ー秋陽スポット	野々山 富子	本巣市
入選	わた絵「ぎふの水はおいしいにゃん」	堀田 きよみ	本巣市
入選	流華	よしひろ	郡上市
入選	非暴力守護神	田中 泰彦	海津市
入選	旅情	南谷 正	海津市
入選	寂しさ	森 延男	笠松町
入選	落葉の景	鹿野 富子	神戸町
入選	道連れ	澁谷 美智子	安八町
入選	湖畔雨後	白川 勇一	揖斐川町
入選	雲波通信	みよい みさ	神奈川県
入選	森・海・川在りて、サケ来るクマ居るアラスカ北海道。 二つの北の大地に先住民の暮らし在り。	浮橋 美頭	富山県

出品目録

入選	淡墨桜（樹魂）	鷺山 大志	静岡県
入選	パンを焼く	家木 幸一	愛知県
入選	輪廻	小川 茂	愛知県
入選	静かなる貝	小倉 義夫	愛知県
入選	(14)	屑	愛知県
入選	どこから来たのか	楠山 こづえ	愛知県
入選	Kitchen	小玉 君子	愛知県
入選	人類の進化その終焉	Jun	愛知県
入選	奏でる	鈴木 孝治	愛知県
入選	のぼる	鈴木 康代	愛知県
入選	ぼくの大好きなきょうりゅうとドラゴン	高橋 幹治	愛知県
入選	Finally came	竹中 英夫	愛知県
入選	怪光	ツルタ マサシ	愛知県
入選	雨の予感	中舘 玲愛	愛知県
入選	何者？	村上 元彦	愛知県
入選	受胎告知	吉田 容子	愛知県
入選	予感	太田 八思	滋賀県
入選	アヤナス	三浦 妙子	滋賀県
入選	噴出、そして還る	Me koto	滋賀県

彫刻

ぎふ美術展賞	内包する形	竹田 歩里	瑞穂市
優秀賞	17才、私の風のカタチ	堀場 葵己	羽島市
優秀賞	エリア180	松原 賢典	岐南町
奨励賞	鳥とおはなし	渡邊 正康	飛騨市
奨励賞	蠟型鑄造作品 対作品 窠Ⅰ・窠Ⅱ	尾藤 敏彦	郡上市
奨励賞	踊るねこ	ハットリ ユミコ	愛知県
入選	異空間の鼓動	安藤 治	岐阜市
入選	白い夢の残響	立崎 博則	岐阜市
入選	陽を浴びる	林 徳和	岐阜市
入選	"生命（いのち）の表現"	樋口 勝彦	岐阜市
入選	根源の渦	篠田 和幸	大垣市
入選	道の空ー3	清水 朋文	大垣市
入選	空想に安寧をえる	杉浦 茜	大垣市
入選	心華	福井 清治	大垣市
入選	木想	稲垣 保幸	多治見市
入選	多治見ネコクラブ	原田 直政	多治見市
入選	ある場所の記憶	若尾 信二	恵那市
入選	白昼夢	松尾 みさき	各務原市
入選	迷宮2025	菅原 光則	山県市
入選	創られしもの	志水 ゆめか	瑞穂市
入選	風祝香伝ーN.N.& T・C,G & S.S.へのオマージュー	konnamakakemono	養老町
入選	知らない	前田 宗達	東京都
入選	再会	中尾 和恵	愛知県
入選	無関心、無関心じゃ無い顔	陸のかいぶつと海のかいじゅう	愛知県
入選	努力の結晶	安達 友彩	三重県

工芸

ぎふ美術展賞	胞膜 20240810	岩井 美佳	石川県
優秀賞	「海の祈りーRéminiscence」	Elitte	土岐市
優秀賞	滴る	千賀 彩永	養老町
奨励賞	流線揺鉢	松井 祐人	多治見市
奨励賞	日常	尾藤 真琴	郡上市
奨励賞	Bug Voice	沙城	愛知県
入選	ふきのとう（フキノトキシシ）	足立 実千子	岐阜市
入選	聚	井田 智子	岐阜市
入選	composition	加藤 文太郎	岐阜市
入選	ORIBE × BLUE III	木村 雅行	岐阜市
入選	七福神香合	栗本 敏雄	岐阜市
入選	山ぶどうバック	工房 凜	岐阜市
入選	マンタの流線に解ける	小酒井 多会子	岐阜市
入選	爛漫	島田 慶呼	岐阜市
入選	ととのうろ series -Mimicry-	shiro	岐阜市
入選	あるがままに自然に寄り添いて	高橋 成子	岐阜市
入選	わた絵 3兄弟の冬	長尾 よしみ	岐阜市
入選	開花 Bloom	森瀬 和廣	岐阜市
入選	ALOHA	横井 栄美子	岐阜市
入選	山の友だち	森本 義夫	高山市
入選	月の滴	小木曾 教彦	多治見市
入選	luminous	井戸 佑季	中津川市
入選	紫にのみこまれゆく大夕焼	森 麻里子	羽島市
入選	生命の水	林 学	土岐市
入選	慈悲	大谷 典子	各務原市
入選	街のにぎわい（オランダ）	小川 真佐子	各務原市
入選	希望	加藤 緑	可児市
入選	つちあそび	森下 胡桃	可児市
入選	潮の住	竹田 歩里	瑞穂市
入選	古川やんちゃー	河合 由美子	飛騨市
入選	夏の朝	小竹 典子	垂井町
入選	その先にあるもの	原 明美	神戸町
入選	アフリカの鼓動	星野 智子	東京都
入選	香りと土の記憶	安達 潤治	愛知県
入選	星座	鬼頭 徹	愛知県
入選	模倣	祖父江 朱莉	愛知県
入選	記憶	中 幸生	愛知県
入選	ノスタルジア	野々垣 ユミ	愛知県
入選	風が通り抜ける V	馬瑜蔚	京都府
入選	Arrival	高橋 のあ	広島県

書

ぎふ美術展賞	白居易詩	高井 敦史	垂井町
優秀賞	窓燈林霏裏	徳田 蒼春	高山市
優秀賞	万葉集	安田 胡園	関市
奨励賞	秋の夕暮	清水 青蘭	岐阜市
奨励賞	皇甫曾詩	奥田 長春	大垣市
奨励賞	秋風に	加藤 玉華	郡上市

奨励賞	草廬（橘曙覧の歌）	鬼頭 伸寿	福井県
入選	満地倒影	浅野 修竹	岐阜市
入選	無為自然	井上 弥紀	岐阜市
入選	無我	詠鼓	岐阜市
入選	八重無くら	田中 尚秀	岐阜市
入選	八重むぐら	野中 曾川	岐阜市
入選	七言律詩 二首	星田 妙子	岐阜市
入選	近江の海	松波 和園	岐阜市
入選	過永樂文長老已卒	村瀬 貴水	岐阜市
入選	石川啄木の詩	安田 朴童	岐阜市
入選	式子内親王の歌	吉村 美瑤	岐阜市
入選	穌 甲骨文字	加藤 展久	多治見市
入選	思いやり	安田 あかり	関市
入選	天臺眺望	千陽	恵那市
入選	花の色は…	浅野 蛭雪	可児市
入選	七律二首	平田 竹庵	本巣市
入選	やすらはで	本田 煌雲	本巣市
入選	ひさかたの	庄村 清泉	郡上市
入選	繫	岩田 佳侃	岐南町
入選	何良傳詩	長屋 純子	笠松町
入選	岩谷時子女史の詩	溝口 彩風	垂井町
入選	李白詩二首	河合 翠山	関ヶ原町
入選	杜甫詩	西松 東雲	輪之内町
入選	五言六句	山田 香遙	揖斐川町
入選	わがこころ…	黒川 啓子	御嵩町
入選	王維詩「過香積寺」	宮野 葵沙	埼玉県
入選	商鑑不遠	桐山 要	愛知県
入選	王維詩	疋田 礼子	滋賀県
入選	なれきにし	清水 直美	大阪府
入選	井の中の蛙	平井 淑子	大阪府

写真

ぎふ美術展賞	水は水の中に溶け込んでいくように	ねこね	東京都
優秀賞	妖塊	岩村 政利	笠松町
優秀賞	最愛のエリナがいたこと	中村 正宏	東京都
奨励賞	早朝の湿原	岡田 則子	飛騨市
奨励賞	鉄塔 瞬き	佐藤 奈緒	飛騨市
奨励賞	光射す	谷口 安秋	飛騨市
奨励賞	出番前	北嶋 敏和	垂井町
入選	寒い朝	池戸 信昌	岐阜市
入選	蜘蛛の巣の惑星	伊藤 美代子	岐阜市
入選	「お〜い」 鬼太郎〜ッ!!	宇佐美 達夫	岐阜市
入選	transformation of time	尾関 浩武	岐阜市
入選	ムンクの叫び	可児 芳春	岐阜市
入選	奈良東大寺二月堂のお水取り・お松明	柴田 学	岐阜市
入選	姥桜	棚橋 靖子	岐阜市
入選	ザ・タンク 1.0	タナカタカノーリ	大垣市
入選	3時間33分の皆既月食	津曲 榮二	大垣市

入選	祭りの美少年	西垣 裕行	大垣市
入選	氷の惑星	日比野 喜一	大垣市
入選	続き	藤田 あい	大垣市
入選	厳寒の刻	水野 靖弘	大垣市
入選	視先の先〜キューバ、時代の狭間で〜	田口 幸弘	高山市
入選	鉦大将	坪内 義彦	高山市
入選	境界のなかで	小川 健太	関市
入選	大晦日の母	桜井 邦彦	関市
入選	今日の主役	下村 匡史	各務原市
入選	これ、何に見えますか	渡邊 道雄	各務原市
入選	小瀬鶴飼人鳥一体戯画	鈴村 龍祐	可児市
入選	Dance・Dance・Dance！	原 美由紀	可児市
入選	おどり最高潮	土田 和明	山県市
入選	ボクらの休暇	牛丸 明美	飛騨市
入選	湖畔の朝	古田 雅久	郡上市
入選	祖母	志水 照男	海津市
入選	パラレル	田中 美嘉	岐南町
入選	静寂	岩田 久男	垂井町
入選	奇跡の光玉	富田 佳信	垂井町
入選	有終を迎える	西松 禮子	輪之内町
入選	困難と、喜びと、希望の道	対馬 めぐみ	揖斐川町
入選	安心感	柴田 要	御嵩町
入選	彼方からの肖像	D1	岩手県
入選	feeling	澤村 明彦	岩手県
入選	GENKAN	katoeri	埼玉県
入選	木立を走る	山内 敏且	愛知県
入選	音止めの滝と富士山の二刀流	小林 寛久	三重県
入選	記録のあなたを見つめて	新藤 由貴	三重県
入選	分断	三上 健二郎	兵庫県
入選	時々刻刻	三村 孝子	広島県
入選	更地	保井 伸基	香川県

自由表現

ぎふ美術展賞	まめらちゃん	森 鈴奈	東京都
優秀賞	顔・顔・顔	鈴木 博也	東京都
優秀賞	纏れる社会	遠藤 慎太郎	愛知県
奨励賞	生命の樹	NOMU	岐阜市
奨励賞	鮎	中島 由美子	郡上市
奨励賞	野原	矢澤 七奈	愛知県
奨励賞	自分が動けば、世界は変わる	奎保 順也	兵庫県
入選	あなたと共に	安藤 ゆり	岐阜市
入選	The red in my heart	江川 菜々美	岐阜市
入選	自己相似	加木 大志	岐阜市
入選	Flower Endless	春日井 希佐子	岐阜市
入選	食べたものでできている	北川 りさ	岐阜市
入選	red paper octopus: edit 4:17	コモリ シゲキ	岐阜市
入選	ブレイクダンスを楽しむ若者	佐藤 正己	岐阜市
入選	わた絵 そばにいるよ	末良 かおり	岐阜市

出品目録

入選	無題	SENRI	岐阜市
入選	25個のひまわり	内藤 英史	岐阜市
入選	浮自由	日置 恵	岐阜市
入選	不思議の森の輪廻	松波 康子	岐阜市
入選	Recognition-2025-A	吉田 尚郁	岐阜市
入選	勢至藍波	相川 出后	大垣市
入選	「M」木陰で。	西本 裕子	高山市
入選	The proof of 21g 展・明・想	可知井 英敬	多治見市
入選	竜宮城のカオス	コヤマ さくらんぼ	多治見市
入選	愛しい布たち	服部 たか子	関市
入選	木材のSDGsの試み	深尾 忠明	関市
入選	夢	武藤 美千代	美濃市
入選	レタリングアート	加地 光希	恵那市
入選	冬の思い出	中村 龍美	山県市
入選	自画像	塚本 諒	飛騨市
入選	鳥瞰（ちょうかん）	坪内 哲治	本巣市
入選	あかつき	遠藤 辰也	笠松町
入選	120年に一度の淡竹開花炭	和みの竹華炭 栗田	垂井町
入選	現在	三島 敏秀	垂井町
入選	本当の想い 無限のチカラ	えこ	神戸町
入選	双葉	伊藤 拡	輪之内町
入選	《木の葉とこの葉 II》no.29	石黒 芙美代	東京都
入選	Mechanical Composition	藤高 圭介	東京都
入選	なごやか な	こじま ちあき	石川県
入選	日常の出来事	小倉 照江	愛知県
入選	Metamorphoser（変容器）	小林 明子	愛知県
入選	自画像	田中 満幸	愛知県
入選	出発点	野瀬 理恵	愛知県
入選	曖昧ー完成しない額縁ー	Mr.Mooos	愛知県
入選	ネ・る・コ・は・そ・だ・つ ～春夏秋冬～	伊藤 良治	三重県
入選	広い世界	瀬上 明里	三重県
入選	何だこれは？Ⅲ	川上 正昭	滋賀県



クロストーク 洋画 ■ 水沢勉 × 柳澤紀子

テーマ／「画のちから」

日 時：8月10日（日）13:30～14:30
場 所：岐阜県美術館 講堂
参加者：64人

水沢氏が聞き手となり、柳澤氏の作品と創作理念を軸に「画のちから」について語り合った。

柳澤氏は1940年生まれ、5歳の時に終戦を迎えた。何があっても身に付けた教育だけではなくならない、と母から教えられ、好きだった絵を生涯の道とした。中学時代から油絵を描いており、東京藝術大学でも油絵から出発したが、日本の銅版画のパイオニアである駒井哲郎氏との出会いを契機に、銅版画へ転向した。駒井氏の講義で初めて「イメージ」という概念に触れ、オディロン・ルドンへの憧憬も重なり、版画に魅了されたという。以後、雁皮紙を用いたエッチングを基盤に表現を続けている。レンブラントに学んだ雁皮紙の使用や手彩色を加えた複雑な刷りの特徴とし、近年はウクライナ・チェルノブイリを題材にしたシリーズ《動物のこぼれ》を制作。核災害後の荒廃と生命力あふれる動物の姿を対比させ、その様子は感動的であると同時に、人間の犯した戦争の不条理を問いかける作品である。水沢氏は、ある意味で否定的な状況の中にある生命力が作品の中に吸い上げられ、版になって生まれてくる印象だと述べた。

柳澤氏の作品は、版画の枠にとどまらず、コラージュやミクストメディアを取り入れ、自由な造形を展開する。代表作《Test Zone》では、核実験をテーマに、銅版と色版を重ね、切り抜いた人体像を貼り込むなど、版画の技法を基盤にしながら絵画的要素を融合した。さらに、自然の中に設置した作品《融 Fusion》では、空や音楽への憧れを自然の中で造形化し、版画的発想を立体表現へと拡張した。こうした試みはまさに、ジャンルを超えた「画のちから」を体現している。

創作の動機として柳澤氏は、命の尊さを一貫したテーマに掲げる。アフリカの成人儀礼に着想を得た《水邊の庭》や、コロナ禍に制作した《羊は静かに草を食む》では、犠牲と祈りを感じながら制作を行った。

詩人の岡田隆彦氏や吉増剛造氏との詩画集制作、若手研究者や美術家との交流も紹介され、世代を超えた対話が創作の刺激となっていることも語られた。岡田氏との出会いで、柳澤氏は、言葉というものの大切さを考えたという。言葉は画と同じくらいの力を持つものであり、自身の制作においては、短いタイトルの中に一つ一つ思いを込めていると語った。

水沢氏は、柳澤作品には、洗練よりも自由を選び、ノイズを恐れず命の表情を伝える力があると評した。

柳澤氏は、ドローイングは山のように描いていると述べた。「画のちから」は、本当に元気のないときでも、一本の線をぐっと引くことで生まれてくる。また、閉じこもらず、他の世代の作家とも対話し、いろいろ解き放っていくことが、作品を作る上でのエネルギーにもなっていると語った。会場は大きな拍手に包まれた。



クロストーク 書 ■ 黒田賢一 × 沢村澄子

テーマ／「書のよここび」

日 時：8月16日（土）13:30～14:30
場 所：岐阜県美術館 講堂
参加者：49人

それぞれの作品や制作の背景などから、書への思いについて意見を交わし合う場となった。

黒田氏は、かな書を専門として幅広い作品を制作している。平安時代から小さな文字が主流だったかな書が、昭和20年頃から壁面に飾る大型作品に展開していった流れを紹介し、自身も試行錯誤を繰り返しながら、大型のかな書に挑戦し、精力的に取り組んできた経緯を語った。書家の青山杉雨氏の助言を契機に、俳句の大胆な表現にも挑戦した。また、自身の作品画像を示しながら、連綿を強調し流れを生かした書法や、逆に、文字と文字とを離して書きながら自然な気持ちの流れを表す「放ち書き」など、多様な試みを紹介した。また、かなの曲線美に対し直線美を追究する作品などを紹介しながら、反対の要素を共存させる美意識を強調し、良い作品には常に反対の要素が同居していることが必要であると述べた。「習って慣れて、学んで捨てよ」を信条とし、古典を学びつつ自分の血を加えた表現を目指すことの重要性を指摘した。学んだ「型（かた）」に自分の「血（ち）」が加わって「かたち」になる。古典古筆から学んだものを参考にしつつも、自分の見方で捉え、それを磨き込んだ中に自分の表現が生まれるのである。

一方、沢村氏は、自身の作品の中から「いろは歌」をテーマにしたものを紹介。2006年、ギャラリーの屋上から、彼岸か此岸かわからぬような盛岡の青い空を見た瞬間、「いろは歌」が降りてきたという。それ以降、書かねばならぬという思いで、何千回と書き続けている。2011年の東日本大震災の際、避難する合間にもいろは歌を書き続けた。「私の書作は密室の祈りである」と述べた。沢村氏が行うのは「書くこと」であり、自身がそれをやり切った後の墨のにじみや紙の変化は「他者の仕事」である。す

なわち、沢村氏の書とは、イメージに基づいて制作されたものではなく、他者との関わりの中で生まれる現象であり結果なのである。専門的な書の知識や経験がなかった高校時代、書道の授業中に別の教科の勉強を隠れてしていた生徒に先生が「君らの中には、筆に託したい思いや紙にぶつけたい思いはないのか！」と怒鳴った瞬間、胸に百ワットの電球が灯り、「私は書く！」と思ったという。その光は消えることなく、そのため今も書き続けているとも語った。

両氏は古典臨書の意義についても議論。黒田氏は「型を学び、自分の形に昇華すること」を重視し、沢村氏は「自分になることが最も難しい」としつつ、外に美を求めることの危うさを指摘した。書や芸術に対して、黒田氏は、見た者に響くものでなければならず、品格が必要であると述べ、品格とは見続けても飽きないものと定義した。一方、沢村氏は、自身の書は表現のためでなく、余計なものを捨てるために書いていると応じた。異なる考えで書に向き合う両氏だが、共通して「書を好きであること」が根底にあることが確認された。

最後に両氏は「書くことの喜び」を強調し、参加者に「元気で書き続けましょう」と呼びかけてクロストークを締めくくった。会場からは大きな拍手が沸き起こった。



クロストーク 写真 ■ 鈴木理策 × 前田真二郎

テーマ／「みるということ」

日 時：8月11日（月）13:30～14:30
場 所：岐阜県美術館 講堂
参加者：52人

前田氏が聞き手となり、鈴木氏の制作を振り返り、制作への思いを掘り下げる場となった。

前半では、鈴木氏の作品シリーズを紹介した。《SAKURA》では、既存概念を超えて、桜を見上げたときの見尽くせない感覚を再現することに挑んだ。大型カメラでピントの前後をぼかし、人が実際に見るときの視線の揺らぎや時間の流れを写真に取り込む試みにより、静止画に動的な体験を宿らせた。鈴木氏は、時間の流れを意識してもらうことがひとつの目標になっていると述べた。

《White》は、写された雪の白さと印画紙の白さとの境界はどこにあるのかという、写真を成立させるものへの問いから生まれた。世界で初めて人工雪を作った中谷宇吉郎氏が実験のために通っていたという十勝岳で撮影を重ねている。

《Water Mirror（水鏡）》は、視線の行き来を1枚の絵の中で経験させるような、水面というモチーフに対するモネの絵画における挑戦にも通じる試み。水面に映る像は実際に経験として現れているが、写真に撮ると虚実が揺らぎ、不安定になり、宙づりになる。その感覚が立ち上がるところがすごく面白い、と鈴木氏は語った。

動画から切り出した《雪華図》や、鏡越しにモデルを撮影する《Mirror Portrait》などでも、独自のアプローチを展開。後者では、撮影者の存在を消し、被写体が鏡で自分の顔を見ている瞬間を撮影している。最後は撮影した写真を反転させることで、従来のポートレートとは異なり、実際に被写体が鏡で見ていたイメージそのままの写真となっている。

鈴木氏は、写真には撮影者の思いを込めることもできるが、カメラという機械を使って撮影する限り、ある種の客観性を含むことになる

べ、写真とは、主観と客観が交錯する表現であり、それが混ざり合って流動的になることが写真の面白さなのであると語った。

後半の質疑では、デジタル技術の進化によって変容する現代の写真表現について議論が行われた。鈴木氏は、修正や合成が容易に可能となった現代では、写真が真実性を失い、絵画に近づいていると指摘しつつ、フィルム撮影を続ける理由として、撮影と現像の時差が生む驚きを挙げた。何枚でも撮影可能で、撮影後に取捨選択できるデジタルカメラと異なり、フィルムでの撮影には緊張感が生じる。デジタルカメラとフィルムカメラは別の道具であると感じるとも述べた。

最後に、「写真表現を志すあなたへ」として鈴木氏からメッセージが伝えられた。「私たちの毎日は何が起きるかわからない。つねに新しい《時》が生まれ続けています。そのことにカメラを付き合わせることで、写真表現として一番豊かになるのではないのでしょうか。自分の想像力を超えていくことがカメラという機械を使う表現の醍醐味であり、その可能性をなくさない方が良い」。写真表現の真髄に触れ、会場は感動の拍手に包まれた。



クロストーク 自由表現 ■ 曾谷朝絵 × 建畠哲 × 堀越英嗣

テーマ／「自由な表現が生まれるとき」

日 時：8月17日（日）13:30～14:30
場 所：岐阜県美術館 講堂
参加者：26人

自由表現部門の審査員2名に、彫刻部門審査員の建畠氏を加え、「自由な表現が生まれるとき」をテーマに鼎談が行われた。建畠氏が聞き手となり、曾谷氏の作品や堀越氏の建築のお話を交えながら、それぞれの「自由」について語り合う場となった。

曾谷氏は自身の制作を紹介。絵画を起点に、油彩・水彩からインスタレーション、映像作品へと展開し、光や空間への関心を軸に活動を広げてきた。コロナ禍で生まれた植物シリーズや、色と音の共感覚を表現する《鳴る色》シリーズなども展開。近年は参加型作品や公共空間への設置も増加しており、令和6年には、初めて彫刻作品にも挑戦した。

堀越氏は建築家の視点から、イサム・ノグチとの協働やモエリ沼公園の事例等を紹介した。ノグチが追求した、一種の「空間の人間化、彫刻の人間化」や「サイトスペシフィックな芸術」は、環境や生活に寄与する芸術のあり方を示すものであり、自由表現の本質に通じると指摘。堀越氏自身は、人々に寄与することを求める彫刻家と同じように、人に喜びを与える世界を目指して建築に向き合っていると語った。

曾谷氏と堀越氏の話を受け、鼎談では「自由とは何か」が議論された。建畠氏は「規範からの解放が自由を生むが、完全な無規範では創造は成立しない」ことを述べ、言語や美術の基礎訓練を引き合いに、自由と規律の逆説的関係を指摘した。曾谷氏は「自由とは自分でルールを決めること」とし、自由な創造には、作品世界の新鮮さと一貫性が必要になるだろうと述べた。堀越氏は「歴史や基礎を踏まえることが、その後生まれる自由の良い影響を与える」と応じた。

自由表現部門は他県展では珍しく、絵画や彫刻など既存ジャンルに縛

られない作品を受け入れるが、厳密な定義はなく、出品者の意思に委ねられている。今回の審査では、「やりきっているか」「やりたいことと表現方法が合致しているか」「今と向き合っているか」「カテゴリーに関係ないその作品自身の良さ」等を重要視したという。総じて、自由表現部門はジャンルを超えた創造の可能性を探る場であり、既存の規範を理解しつつ、それを乗り越える挑戦が求められることが確認された。

自由と表現に対する理解を深める素晴らしい機会となった。会場は大きな拍手に包まれた。



作品講評会 ■ 日本画

講師：岩田壮平、鬼頭美奈子

日 時：8月10日（日） 11:00～12:00
場 所：岐阜県美術館 展示室3
参加者：64人

総評

日本画部門は応募点数が多く、入落はわずかな差。技術だけでなく「空気感」「存在感」を画面に織り込めるかが評価の鍵となった。若手作家の挑戦や未熟さも、作品の強度やリアリティとして高く評価された。また、日本画特有の写生・下図・転写・岩絵の具による計画的制作の重要性が再確認された。

ぎふ美術展賞《アイデアの形》

大きさを感じ、ひきつけられる作品。クリムト的装飾を取り込み、自己の内面を表現することに挑戦している。模索中の姿は未熟でありながらも、それが逆に作品の力となっており、将来性を高く評価した。

優秀賞《秋寂び》

自然と向き合い続け、その美しさを冷静に捉えられている。長い時間をかけて作り上げられた自身の世界観が熟成され、見事に作品に表現されているところが大きな魅力。

優秀賞《エンドロールはまだ遠く》

暗く奥行のある高速バスに、将来への漠然とした思いや不安が表れている。その暗いトーンの中にも、光が効果的に配置され、カーテン越しに見える風景に期待感も感じられる。若さゆえのリアルな感情がうまく表現された作品。

奨励賞《花の舞ふ》

人物のシルエットや視線が戦争や平和への祈りを想起させる、見れば見るほど味わい深い作品。人間の泥臭さや背負うものの重みが感じられ、黒の多様な使い方にオリジナリティが表れている。

奨励賞《花回廊》

温室の空気感を丹念に描写し、見事に表現されている。密度の高い描き込みながら静謐な世界が構築されている。画面の隅へも意識が向けられており、その向こうに広がる世界も感じさせる。

奨励賞《碧を味わう》

クリームソーダをテーマに、多様な装飾表現や技法を試みたことがよく伝わってくる作品。若い感覚と挑戦心が光っており、構図力と側面処理の工夫も評価した。

奨励賞《もちもちな夢を見て》

猫の愛らしさから、作家の愛情や優しさが伝わってくる作品で、余白の美を活かした構成となっている。タイトルと造形性の一致も魅力。未熟ではあるが、このときにしかできない表現に発展性も感じる。



作品講評会 ■ 洋画

講師：水沢勉、柳澤紀子

日 時：8月10日（日） 15:00～16:00
場 所：岐阜県美術館 展示室3
参加者：121人

総評

「画のちから」を伝えてくれる作品を賞に選んだ。作品の完成度や技術の巧拙よりも、表現の純度やテーマ性、エネルギーを重視した審査となった。作者の個性や投げかける力を感じられる作品も評価した。

ぎふ美術展賞《サルのいる風景》

見る者に訴えてくるものを感じる作品。動物の表情は型にとらわれず自由で、背景に毛皮を貼り付ける発想は大胆で現代的。イラスト的要素もあるが、背景の添え方からも、作者の描く楽しさが強く伝わってくる。

優秀賞《(内的時間意識の)1秒》

シンプルな構成ながら、イメージが生まれるときの新鮮さを追求する、創作の原点を示すような作品。哲学的なタイトルと衝動的な線でありながら、構図や紙色の工夫もなされている。本作の入賞は、現代の美術の中で、一つの投げかけの意味を持つ。

優秀賞《慈雨》

自然の緩やかさや優しさを色と形で優しくつかんでいる印象。美しい色彩には独自の感性が表れており、空気感や湿気が表現されている点も評価した。

奨励賞《底流》

非常にミニマムな表現。繊細な傷や色層の重なりに深みがあり、よく見ていくと、様々なニュアンスが付けてあり、表現の力を感じる。見る者の想像力を喚起する、ユニークな作品。

奨励賞《転寝》

セーターのブルー、椅子の白の入ったエメラルド、襟のちょっとした白など、色感が秀逸。若さがにじみ、これからも描き続けてほしいと思わせるような、将来性を感じる作品。

奨励賞《一日一枚～山との対話～》

自分の中に求めるものは何か考えながら毎日見ている風景を描き続けており、その作品を繰り返し見直すようなアプローチをしていると感じられる。特に赤く描かれた空には、作者の心やピュアな気持ちが素直に表れている。

奨励賞《化身》

カフカの《変身》を思わせる、複雑に濃厚に層が重なり合った作品。にじみ出ているとは違う努力の跡や、現代にマッチし共感を呼ぶような作風を評価した。



作品講評会 ■ 彫刻

講師：建畠哲

日 時：8月17日（日）11:00～12:00
場 所：岐阜県美術館 多目的ホール
参加者：41人

総評

彫刻部門は素材・技法・発想の多様性が顕著。陶、金属、木、紙など幅広い表現が見られた。評価のポイントは「造形の必然性」「素材の生かし方」「構成美」「発想の自由さ」。完成度だけでなく、遊び心やエキセントリシティ（奇抜さ）もアートの魅力として重視。

ぎふ美術展賞《内包する形》

陶芸のひも作り技法を用いた大作。外形の渦巻きの内部に空洞をはらんでおり、緊張感が成り立っている造形。素材選択の必然性と完成度を高く評価した。

優秀賞《17才、私の風のカタチ》

木と石を組み合わせ、精緻に整理された知的な構成となっている。台座自体が造形物として強い存在感を持っている点が面白い。高い完成度を評価した。

優秀賞《エリア180》

焼き物を用いた有機的造形。人体のメタファーを含み、不穏さと複雑なマチエールが魅力。質感や色彩が触覚的感覚を喚起し、造形の面白さを堪能させてくれる作品。

奨励賞《鳥とおはなし》

オブジェとしての楽しさと、ユニークな楽器としての面白さがある作品。観客が参加して遊べるような彫刻の楽しさを評価した。

奨励賞《蠟型鑄造作品 対作品 窠Ⅰ・窠Ⅱ》

型取りによる集合彫刻で、人体のイメージとメカニカルなイメージがうまく融合している。鑄金技法ならではの表現の可能性が生かされ、構成の面白さが光っている。

奨励賞《踊るねこ》

ユーモラスでほのぼのとした造形で、オブジェとしての面白さが横溢している。縛りのない自由な発想と遊び心を評価した。



作品講評会 ■ 工芸

講師：花里麻理、正村美里（岐阜県美術館副館長）

日 時：8月9日（土）15:00～16:00
場 所：岐阜県美術館 展示室4
参加者：42人

総評

工芸は生活のそばにあり身近な存在であり、応募作品は、身近な感覚の延長線上にあるものと、表現を突き詰めたものが混在し、多様な素材・技法が見られた。作品の幅が広く審査は難しかったが、作り手の熱意と表現力を感じる作品を入賞とした。

ぎふ美術展賞《胞膜 20240810》

細かい線が不規則に張り巡らされ、毛細血管が広がっていくような生々しさを感じる作品。繊細な工程を染織技法で突き詰めている点を評価した。刺繍部分へのもうひと工夫で、さらなる展開が期待できる。

優秀賞《「海の祈り-Réminiscence」》

工芸作品はひとつの素材にこだわるものが多いが、木・貝殻・ガラスという複数の素材を組み合わせるエネルギーが際立っている。ストーリー性も感じる作品。

優秀賞《滴る》

土が見せる様々な表情を捉える執着とも呼べるほどの集中力と熱意を評価した。内側まで細工が施されている力作。立体物としての存在感が出てくるとより迫力が出るだろう。

奨励賞《流線揺鉢》

水の流れや土の柔らかさを感じる表現で、今後の制作を期待させるような造形。シャープさを加えることで、さらに際立つ作品となる。

奨励賞《日常》

作品のコンセプトをガラスという技術に落とし込み、緻密に積み上げられていることが伝わる。仕上げの方法も、多色な作品をまとめる助けとなっている。精度が高いが、形状の改善で可能性が広がる。

奨励賞《Bug Voice》

紙素材を活かし、色彩の選択や、広がりを感じさせる表現が魅力の作品。仕上げやフレーミングに丁寧さを加えると、表現力の向上や造形的な展開が期待できる。



作品講評会 ■ 書

講師：黒田賢一、沢村澄子

日 時：8月16日（土） 15:00～16:00
場 所：岐阜県美術館 展示室4
参加者：58人

総評

書の評価軸としては、「線質」「白の美しさ」「変化と統一」「墨色と紙の調和」などが挙げられる。公募展では作品の存在感・構成力が重要だが、練度だけでなく、魂・気迫・感動を伝える力も重視した。書は積み重ねの芸術であるが、伝統文化としての責任を意識しつつも、自由な発想が見られた点も評価したい。

ぎふ美術展賞《白居易詩》

圧倒的な存在感を持つ作品。線の多彩さ、大小の文字、余白が美しく、特に余白の白の表現が目目を引いた。変化がありながらも統一感を感じられた。

優秀賞《窓燈林靄裏》

古典に立脚した練度の高さを感じた。構築性ある文字列の中の白の抜き方が巧みである。非常に安定感があり、作品の充実感を評価した。

優秀賞《万葉集》

流れの美しさとスタッカートの切れ味の美しさという、反対の要素が同居している。潤筆と渴筆がうまく紙面に表現されており、爽やかさを感じる。好感度の高い作品。

奨励賞《秋の夕暮》

左右に揺れる動きが心地よい作品。計算された構成ながら、爽やかに見て取れる。線の太さが一定であるところも魅力。

奨励賞《皇甫曾詩》

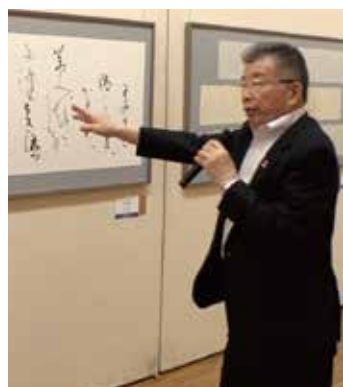
線の充実感が前面に出ていて力強さがある。楷書の本当の良さが出ている作品。白の取り方が適度で美しく、非常にまとまりがある。

奨励賞《秋風に》

紙の色と墨の色がうまく調和し、大小の文字配置で動きが演出されている。柔らかく温かい雰囲気がよく伝わってくる点を評価した。

奨励賞《草廬（橘曙覧の歌）》

大書した墨の強さを持つ部分と、飾らない文字の和やかな雰囲気を持つ部分がうまくマッチしている。余白の美しさが際立つ作品。



作品講評会 ■ 写真

講師：鈴木理策

日 時：8月11日（月） 15:00～16:00
場 所：岐阜県美術館 展示室4
参加者：64人

総評

写真的な技術や完成度だけでなく、見る側に余白を残す表現も評価のポイントであった。タイトルは写真の見え方を補う役割を持つが、説明過多は避けるべき。撮影で「何を入れるか」だけでなく「何を入れないか」も写真の重要な仕事であると感じる。

ぎふ美術展賞《水は水の中に溶け込んでいくように》

複数枚の写真を組み合わせて、場所との関わりや体験が物語的に表現されている。作者の思いが伝わる作品で、見る者にそこに关わる余地を与えている。どこか悲しげで寂しげな部分にも共感を覚えた。

優秀賞《妖塊》

安定した造形美を持つ作品。一見何を映しているかわからない驚きがあり、その後で残雪と分かると見え方が変わってくる。日頃見ている風景がある種の彫刻作品のように捉えられる点も魅力。プリントや額装の質も高評価。

優秀賞《最愛のエリナがいたこと》

風に舞うコンビニ袋を撮影した作品。どう映るかわからないものを撮影する行為はスナップ的な腕前も試され、非常に挑戦的で写真的。背景となる場所の選び方と袋の大きさ、カメラからの距離が絶妙。

奨励賞《早朝の湿原》

タイトルがそのまま表れているように、早朝のこの場所の温度や質感がよく表現された素直な作品。構図をもう少し工夫するとさらに面白い要素が表れてくる。

奨励賞《鉄塔 瞬き》

移動中の車から撮影されたもので、どう写るか分からない面白さが表れている。映し出されたスピード感やグラデーションは版画的で、味わい深い作品。

奨励賞《光射す》

日頃見慣れた、かつ使い古して変色したブルーシートにポイントを持っていき撮影した点を評価した。抽象化寸前まで寄って撮影し、距離感と光の透過を生かした構図となっている。色や光の扱いが秀逸。

奨励賞《出番前》

シャッターチャンスのようなものと構図が非常に安定している。色彩バランスが良く、祭りの緊張感が縦構図で表現されている。一瞬音が聞こえなくなるような、写真の持つ効果が良く表現された作品。



作品講評会 ■ 自由表現

講師：曾谷朝絵、堀越英嗣

日 時：8月17日（日） 15:00～16:00

場 所：岐阜県美術館 展示室4

参加者：85人

総評

自由表現部門では、「やり切っているか」をひとつの評価軸として審査した。ジャンルを超えた発想や素材の多様性が感じられ、アートの持つ「問いかける力」を持つ作品も見られた。展示においては、配置・展示方法も作品の一部として重視した。この部門ならではの、従来の枠に収まらない表現もあった。

ぎふ美術展賞《まめらちゃん》

完成度が高く、世界観が完結している作品。かわいさの裏に毒があり、環境問題も想起させる造形。作家の思いが細部まできめ細やかに実現され、やり切っていることが伝わってくる。

優秀賞《顔・顔・顔》

幾何学の中に生命や自然が感じられ、印象的な目の造形からは、古代的モチーフも想起される。制作に迷いが感じられず、見る者に発信して問いかける力を持つ作品。

優秀賞《縫れる社会》

新聞紙のパイプでできており、社会問題にまっすぐに向き合っている作品。非常に軽量で、中が空洞になっている発見は新鮮だった。大切なことを忘れるなというメッセージも感じる。

奨励賞《生命の樹》

色彩感覚が非常に魅力的。遠くから見ると曼荼羅的で大きな木が浮かび上がり、近くで見ると細かく描き込んであり、かわいらしい世界がある。どちらの世界も楽しめる作品。

奨励賞《鮎》

自然の素材を使って、自然の生命力が表現されている。作家の想像力が豊かで、その気付きを見る者に伝えてくるような、自由表現部門だからこそその作品。

奨励賞《野原》

一見すると表面的に見えるが、奥行きが強く感じられる。能動的に絵画を選び、それを自由表現部門に出した意思も評価した。まさにやり切っている強さが伝わってくる。

奨励賞《自分が動けば、世界は変わる》

振り子が動くことで円盤が回り、小さなことでまさに「世界は変わる」ということが感じられる表現。北極星を意識した軸設定など、コンセプトの深さも評価した。



応募状況

第6回ぎふ美術展 応募・審査結果

	日本画	洋画	彫刻	工芸	書	写真	自由表現	合計
応募点数	72	230	29	79	71	173	126	780
ぎふ美術展賞	1	1	1	1	1	1	1	7
優秀賞	2	2	2	2	2	2	2	14
奨励賞	4	4	3	3	4	4	4	26
入選	30	69	19	34	29	40	40	261
入賞・入選	37	76	25	40	36	47	47	308
入賞・入選割合	51.4%	33.0%	86.2%	50.6%	50.7%	27.2%	37.3%	39.5%
県内	44	164	21	56	60	146	92	583
県外	28	66	8	23	11	27	34	197
県外割合	38.9%	28.7%	27.6%	29.1%	15.5%	15.6%	27.0%	25.3%
平均年齢	56.8	54.4	51.3	56.9	57.2	64.4	41.7	55.2

市町村・県別の応募者数

県内

市町村名	計	市町村名	計
岐阜市	155	岐南町	11
大垣市	59	笠松町	7
高山市	30	養老町	11
多治見市	40	垂井町	17
関市	19	関ヶ原町	2
中津川市	7	神戸町	5
美濃市	4	輪之内町	3
瑞浪市	6	安八町	3
羽島市	4	揖斐川町	7
恵那市	32	大野町	3
美濃加茂市	6	池田町	5
土岐市	6	北方町	2
各務原市	35	坂祝町	0
可児市	16	富加町	1
山県市	11	川辺町	0
瑞穂市	19	七宗町	0
飛騨市	14	八百津町	3
本巣市	10	白川町	0
郡上市	16	東白川村	0
下呂市	5	御嵩町	4
海津市	5	白川村	0
合計		583	

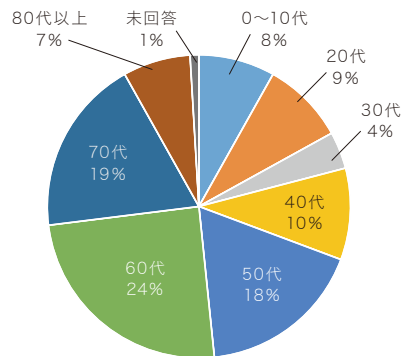
県外

都道府県	計
岩手県	2
茨城県	1
埼玉県	4
東京都	15
神奈川県	4
富山県	2
石川県	2
福井県	1
静岡県	3
愛知県	132
三重県	10
滋賀県	7
京都府	1
大阪府	3
兵庫県	4
広島県	4
香川県	1
愛媛県	1
合計	197

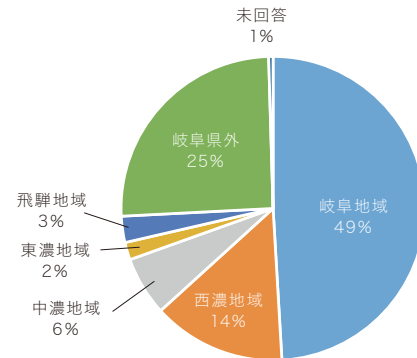
来場者アンケート

対象者 第6回ぎふ美術展来場者（17,502人）
調査方法 紙面およびウェブ回答による任意のアンケート調査
回答数 430件

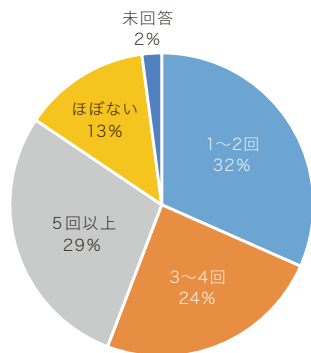
1 年齢



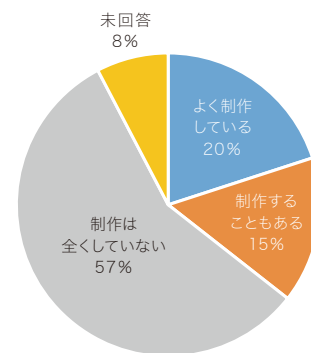
2 お住まいの地域



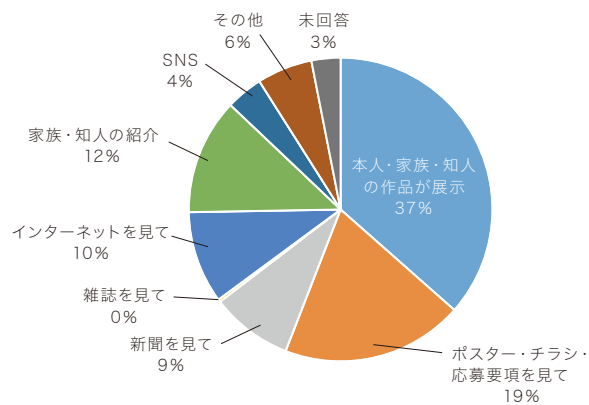
3 各種美術展への年間訪問回数



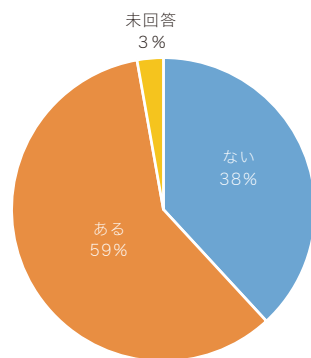
4 美術作品制作



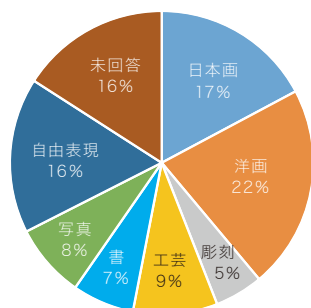
5 ぎふ美術展の開催をどちらで知りましたか。



6 岐阜県美術展（県展）又はぎふ美術展を訪問・鑑賞されたことがありますか。



7 特に印象に残った部門は。





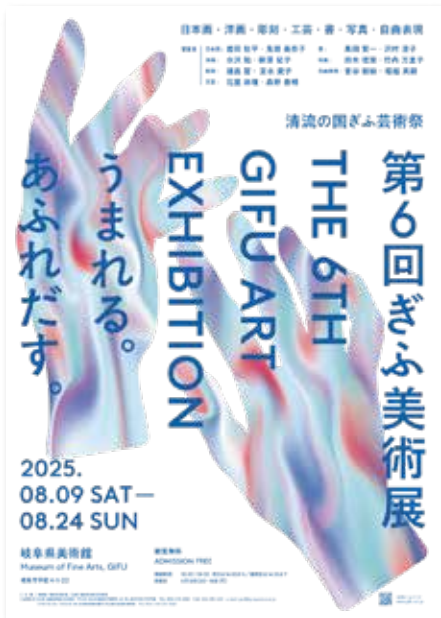
作品募集ポスター



作品募集チラシ（表）



作品募集チラシ（裏）



展覧会ポスター



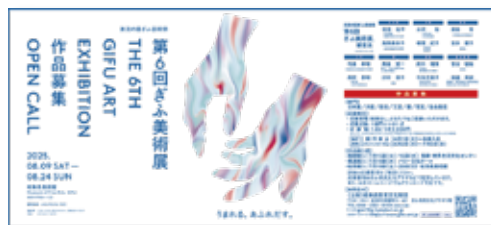
展覧会チラシ（表）



展覧会チラシ（裏）



岐阜新聞（2025.2.1）



中日新聞（2025.2.1）



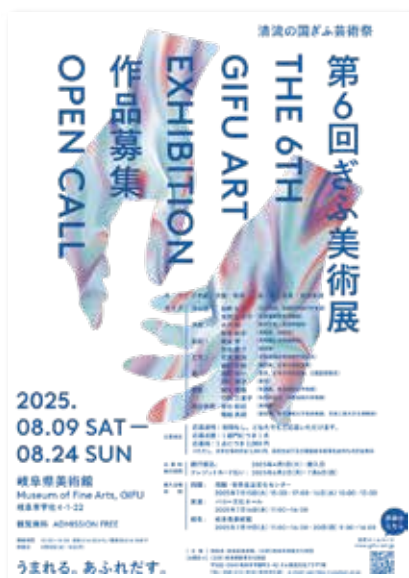
岐阜新聞／中日新聞（2025.8.9）



岐阜新聞 審査員メッセージ連載（2025.3.17～30）



審査員講評パネル



美術の窓 (2025 年 4 月号/株式会社生活の友社刊行)



岐阜県美術館正面看板



岐阜県美術館北側看板



展示室3入口看板



岐阜県美術館エントランスホール看板



GiFUTO (2025 年 3 月号/株式会社中広刊行)



3D バーチャル美術展①



3D バーチャル美術展②

「3D バーチャル美術展」の公開

第6回ぎふ美術展の様子をパソコン、スマートフォンなどの画面で、いつでも、どこでも、誰でも鑑賞していただけるよう、3DVRで公開しています。右の二次元コードよりご覧いただけます。



記念品の紹介

◎ぎふ美術展賞（各部門1点）

岐阜県重要無形文化財「黄瀬戸」保持者 安藤日出武氏制作 花入



安藤日出武氏略歴

- 1938 年 岐阜県多治見市に生まれる
- 1963 年 朝日陶芸展初入選
- 1964 年 日本伝統工芸展初入選
- 1971 年 日本陶芸展初入選
- 1975 年 中日国際陶芸展初入選
- 1990 年 第8回「加藤幸兵衛賞」受賞
- 1992 年 多治見市文化芸術功労表彰
- 1998 年 美濃陶芸庄六賞茶碗展「古美濃茶碗」大賞受賞
多治見市無形文化財保持者に認定
- 2002 年 岐阜新聞大賞・文化賞受賞
- 2003 年 岐阜県重要無形文化財「黄瀬戸」保持者に認定
- 2011 年 岐阜県教育文化功労者表彰
- 2013 年 岐阜県文化功労者顕彰
- 2016 年 旭日双光章受章
東海テレビ文化賞受賞
- 2017 年 「未完のままに」（中部経済新聞社）刊行
- 2022 年 紺綬褒章受章
- 現在 日本工芸会正会員

◎優秀賞（各部門2点）

岐阜県重要無形文化財「織部」保持者 玉置保夫氏制作 花入



玉置保夫氏略歴

- 1941 年 岐阜県多治見市に生まれる
- 1965 年 第11回日本伝統工芸展初入選（以後、入選多数）
- 1977 年 東海伝統工芸展最高賞受賞（1984年も同賞を受賞）
- 1980 年 日本陶磁協会賞受賞
- 1986 年 第1回国際陶磁器展美濃 審査員特別賞受賞
- 1991 年 岐阜県芸術文化活動等特別奨励賞受賞
- 1995 年 多治見市芸術文化部門功労表彰受賞
- 1999 年 第5回美濃陶芸庄六賞茶盃展特別永年保存作品に選定
- 2002 年 多治見市無形文化財「織部」保持者に認定
- 2008 年 岐阜県無形文化財「織部」保持者に認定
- 2012 年 岐阜県教育功労者表彰受賞
- 2015 年 岐阜県各界功労者表彰受賞
- 2020 年 旭日双光章受章
- 2021 年 東海テレビ文化賞受賞
- 現在 日本工芸会正会員
(公社)日本工芸会東海支部参与
(公社)美濃陶芸協会顧問

第6回ぎふ美術展を終えて

平成30年に旧来の「岐阜県美術展」から新たに生まれ変わった「ぎふ美術展」も、今回で6回目を迎えました。

今夏は記録的な猛暑となりましたが、そのような中でも多くの皆様に御来場いただきましたこと、心からお礼申し上げます。本展の開催が、芸術を通じて心の潤いを分かち合える場となったのであれば、これ以上の喜びはありません。

本展では、作家のキャリアや年齢、居住地、障がいの有無を問わず広く公募し、審査員には毎回各分野の第一線で活躍される方々をお迎えして、公開での審査を実施しています。審査会では、審査員の皆様の熱心な議論により、入選作品が選定されました。審査員の強い個性は、多様かつ新しい作品、作者の掘り起こしにつながり、展覧会全体に新鮮さが感じられます。

会期中、審査員によるトークイベントや作品講評会を開催し、

作家、審査員の皆様と御来場いただいた方々との交流の場を設けました。このような取り組みが、多くの方々の芸術への関心を高め、創作活動の励みとなることを願っております。

最後に、本展の開催にあたり、御支援、御協力を賜りました皆様に、改めて深く感謝申し上げます。

次回の「第7回ぎふ美術展」は、令和8年に開催予定です。より多くの皆様に御参加いただき、次世代に持続可能な公募展として発展していくことを願ってやみません。

ぎふ美術展企画委員会委員長 神戸 峰男

.....

運営委員会 委員名簿

(委員 氏名 50 音順 敬称略)		
役 職	氏 名	所 属 機 関 ・ 団 体 役 職
委員長	神 戸 峰 男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
委 員	臼 井 千 里	書家、岐阜県世界青年友の会常務理事
	小野寺 茂樹	日本放送協会岐阜放送局局長
	角 田 茉 瑳 子	児童文学作家
	加 藤 幸 兵 衛	陶芸家
	高 橋 秀 治	豊田市美術館館長
	土 屋 明 之	岐阜県芸術文化会議会長
	土 屋 禮 一	日本画家、日本芸術院会員、日展副理事長
	日 比 野 克 彦	岐阜県美術館館長、東京藝術大学学長

(2025 年 9 月末日時点)

ぎふ美術展 企画委員会 委員名簿

(委員 氏名 50 音順 敬称略)		
役 職	氏 名	所属機関・団体役職
委員長	神戸 峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
委 員	大池 青岑	書家、中京大学教授
	河西 栄二	岐阜大学教育学部教授
	鈴木 徹	陶芸家
	長谷川 喜久	日本画家、名古屋芸術大学教授
	古田 菜穂子	(公財) 岐阜県教育文化財団アート利活用アドバイザー、 兵庫県立大学大学院特任教授
	前田 真二郎	情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) 教授
	矢橋 頌太郎	洋画家

(2025 年 9 月末日時点)

第6回ぎふ美術展 THE 6TH GIFU ART EXHIBITION

発行年：令和8年1月発行

デザイン 伊藤デザイン事務所 伊藤 裕之

印刷 株式会社協和印刷工業

撮影 Choice 宮川 邦雄

編集・発行 岐阜県

公益財団法人岐阜県教育文化財団
〒502-0841 岐阜市学園町3丁目42番地 ぎふ清流文化プラザ1F
Tel:058-233-8161(県民文化課) Fax:058-233-5811

本書掲載の肩書きは令和7年8月末日時点のものです。

うまれる。
あふれだす。

